佐賀県文化財調査報告書第24集

田代天満宮東方遺跡

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第24集

田代天満宮東方遺跡

佐賀県教育委員会

は　じ　め　に

鳥栖市に建設されている九州横断高速自動車道の才２インターチェンジ工事現場で甕棺群が発見され，日本道路公団から佐賀県教育委員会へその調査について依頼があった。

県教育委員会は，田代天満宮東方遺跡発掘調査委員会を組織して，昭和48年１月29日から２月20日まで緊急発掘調査を実施した。

この報告書は，調査後応急にまとめたものであるため不備な点も多々あろうかと思われるが，弥生時代の研究資料として活用していただければ幸いである。

なお，発掘調査にご協力いただいた鳥栖市教育委員会をはじめ関係各位ならびに早急に記録をまとめていただいた執筆者諸氏に対し，厚く感謝申しあげる次第である。

昭和48年３月31日

佐賀県教育委員会

教育長　大　園　　弘

もくじ

Ⅰ　発掘調査の経過
1　田代天満宮東方遺跡発掘調査委員会…… 1
2　発掘調査日誌 …… 2
Ⅱ　田代天満宮東方遺跡の環境 …… 5
1　地理的環境 …… 5
2　歴史的環境 …… 5
Ⅲ　田代天満宮東方遺跡の概要 …… 16
1　甕棺墓等の概要 …… 16
2　甕棺墓等の分類 …… 17
(1)　大形の甕棺墓 …… 17
(2)　中形の甕棺墓 …… 25
(3)　小形の甕棺墓 …… 29
(4)　壺棺墓 …… 30
3　ま　と　め …… 31
あ　と　が　き …… 47

付図もくじ

1　田代天満宮東方遺跡の所在地 …… 4
2　丹塗大形器台 …… 16
3　第70号大形合口甕棺墓の平面図および断面図 …… 18
4　第38号大形合口甕棺墓の平面図および断面図 …… 19
5　第74号大形合口甕棺実測図 …… 20
6　第68号大形合口甕棺実測図 …… 20
7　第３号大形合口甕棺（上甕）実測図 …… 21
8　第４号大形合口甕棺　実測図 …… 21
9　第５号大形合口甕棺（上甕）実測図 …… 21
10　第６号大形合口甕棺実測図 …… 22
11　第18号大形合口甕棺実測図 …… 22
12　第91号大形覆口甕棺実測図 …… 22
13　第34号大形合口甕棺実測図 …… 23
14　第37号大形合口甕棺実測図 …… 23
15　第43号中形合口甕棺実測図 …… 24
16　大形土拡内の中形合口甕棺墓群実測図 …… 25
17　第32号中形合口甕棺実測図 …… 26
18　第60号中形合口甕棺実測図 …… 26
19　第28号中形合口甕棺実測図 …… 27
20　第75号中形合口甕棺実測図 …… 27
21　第63号中形合口甕棺実測図 …… 27
22　第77号中形合口甕棺実測図 …… 28
23　第61号中形合口甕棺実測図 …… 28
24　第66号小形甕棺（上甕）実測図 …… 28
25　第53号中形合口甕棺　実測図 …… 28
26　第78号小形覆口甕棺実測図 …… 29
27　第93号壺棺実測図 …… 30

図　　版

1　田代天満宮東方遺跡発掘調査風景 …… 34
2　遺跡近郊の航空写真 …… 34
3　遺跡の全景 …… 35
4　グループをなす甕棺墓群 …… 36
5　第68号大形合口甕棺墓 …… 37
6　同肩部の沈線文 …… 37
7　第70号大形覆口甕棺墓の挿入口 …… 38
8　同断面 …… 38
9　第35号大形覆口甕棺墓 …… 39
10　第34号大形合口甕棺墓 …… 39
11　第38号大形合口甕棺墓の挿入口 …… 40
12　同土壙ラインの状態 …… 40
13　第43号中形合口甕棺墓 …… 41
14　第60号中形合口甕棺墓 …… 41
15　第61号中形合口甕棺墓 …… 42
16　第63号中形合口甕棺墓とその土壙ライン …… 42
17　第77号中形合口甕棺墓の粘土帯 …… 43
18　第77号中形合口甕棺墓 …… 43
19　第32号中形合口甕棺墓の粘土帯 …… 44
20　第32号中形合口甕棺墓 …… 44
21　第93号壺棺墓の出土状態 …… 45
22　第78号小形覆口甕棺墓の粘土帯と土壙 …… 46
23　第78号小形覆口甕棺墓 …… 46

Ⅰ　発掘調査の経過

九州横断高速道路の鳥栖第３インターチェンジの工事現場から甕棺墓等が出土しているとの連絡を昭和48年１月６日鳥栖市教育委員会から受けたので即刻，工事中止を依頼するとともに１月７日に現場確認を行った。この結果，鳥栖市田代本町に在る天満宮東方の丘陵に甕棺墓が認められた。

この調査結果にもとづいて，県教育委員会は日本道路公団に対して，発掘調査を実施する必要があることを報告した。

日本道路公団から，県教育委員会へこの遺跡の発掘調査実施について依頼があった。そこで教育委員会田代天満宮東方遺跡発掘調査委員会を設置して，昭和48年１月から２月にかけて緊急発掘調査を実施したのである。

１．田代天満宮東方遺跡発掘調査委員会

(ア) 委　員　会

委員長	大園　弘	県教育委員会教育長
委　員	鏡山　猛	県文化財専門委員
〃	七田忠志	〃
〃	佐藤儀三	鳥栖市教育委員会教育長

(イ) 事　務　局

局　長	永竹　威	県教委文化課長
次　長	田中寿義雄	〃　補佐
庶務・会計	安本雪男	〃　庶務係長
庶務・会計	中野安正	〃　庶務係
庶　務	中川原武	鳥栖市教育委員会
〃	原野直人	〃

(ウ) 発掘調査員

調査総括	木下之治	県教委文化財調査監

調査主任　柳　川　俊　二　県教委文化課文化財係長
調査責任者　木　下　　巧　　〃　　〃　文化財係
調　査　員　山　本　弘　道　　〃
調査補助員
天　本　洋　一
盛　峰　　雄（福岡工業大学）
佐賀西高等学校社会研究部

2．発掘調査日誌

1月30日　(火)　晴

9時30分から現地で鍬入式を行う。県教委・鳥栖市教委・地元関係者・調査員および日本道路公団等が参列した。

式後ただちに道路の側溝部に露出している甕棺群の発掘調査にとりかかる。一方，松尾建設の提供になるブルドザーで遺構の範囲確認を行う。その結果，南北25m，東西25mの範囲に甕棺墓が埋蔵されていることを確認した。甕棺19組を確認した。

1月31日　(水)　晴

側溝部から南へ向けて排土作業を続ける。甕棺24組まで確認する。

2月1日　(木)　曇

作業を続行。甕棺29組まで確認する。ニッカウイスキー鳥栖工場よりポリコンテナ100箱の寄贈を受けた。

2月2日　(金)　晴

ブルトザーの提供を受け全面的に表土排除を行う。甕棺38組まで確認。

2月3日　(土)　晴

中央部の作業を続行し，甕棺52組まで確認する。

2月5日　(月)　晴

大形土坑を確認し，その土坑中に中形甕棺4組を確認した。本日までに甕棺60組を確認。

2月6日　(火)　雨

雨天のため宿舎にて土器の実測作業を行う。

2月7日　(水)　晴

大形土坑内の中形甕棺3組を追加し，7組となった。甕棺65組まで確認。

2月8日 (木) 晴

西部の作業を続行し，本日までに70組の甕棺を確認した。

2月9日 (金) 晴時々雪

西部の作業を続行する。このところ寒気が厳しい。甕棺73組まで確認する。

2月10日 (土) 晴

南部の調査を続行する。甕棺80組まで確認する。

2月12日 (月) 晴

南部の調査を行なう。甕棺85組を数える。

2月13日 (火) 晴

南部の調査を続行する。甕棺95組を数える。

2月14日 (水) 晴

発掘作業は本日で終了した。発掘機材・出土品を宿舎に運搬する。

2月15日 (木) 晴

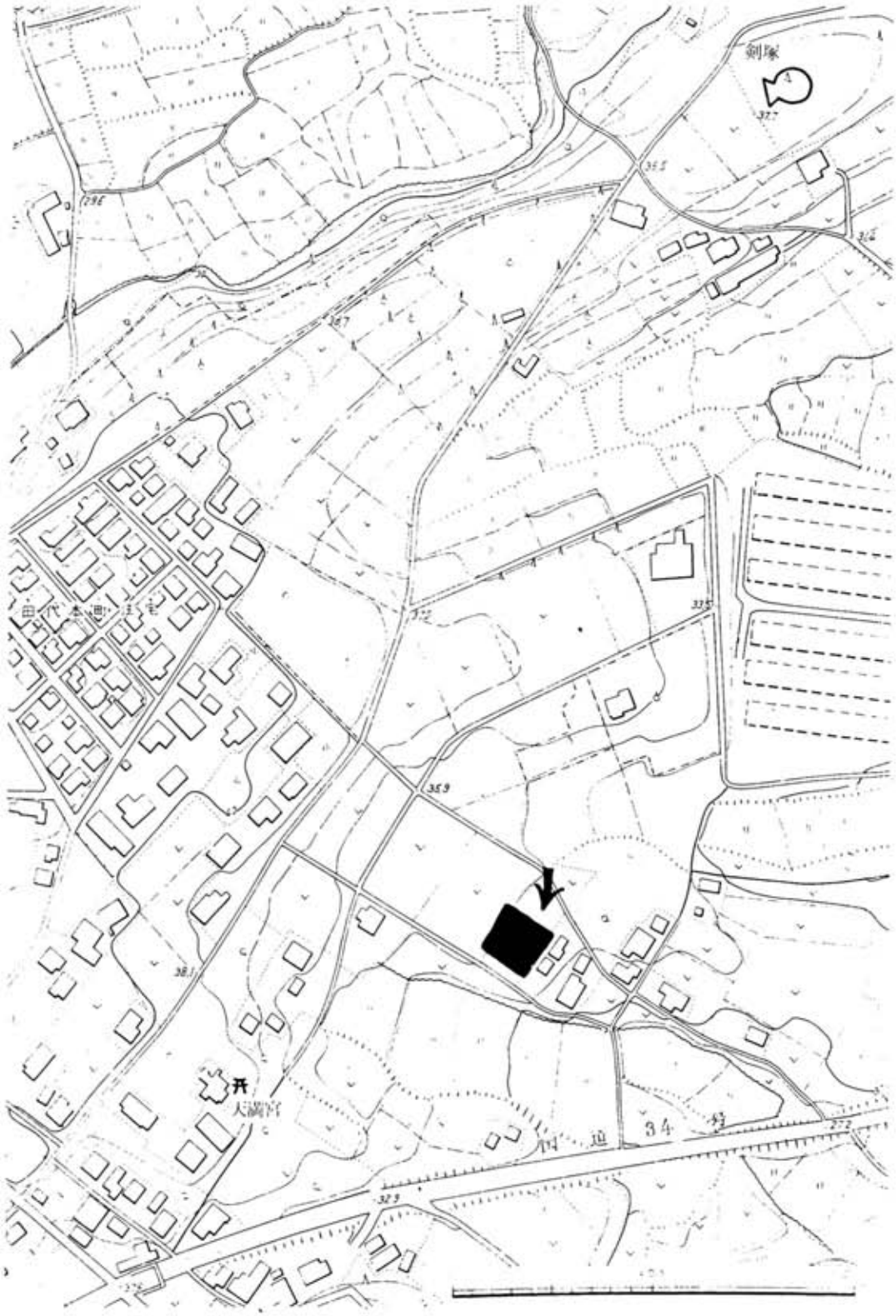
午前中は発掘調査の整理，あとかたづけを行なう。午後，宿舎にて出土資料の水洗いを行なう。また，発掘現場にブルドザーを導入して，調査の不備がなかったかを確認する。

2月16～19日

宿舎で出土資料の水洗いを完了し，荷造りを終える。

宿舎は鳥栖市田代本町公民館とし，花田静枝氏の心温まる接待に感謝する。

田代天満宮東方遺跡の所在地



Ⅱ　田代天満宮東方遺跡の環境

1．地理的環境

発掘調査を実施した田代天満宮東方遺跡は鳥栖市田代本町中尾1069番地にある。九千部山（標高 847m ）東南に延びた低段丘端の水田中に在る遺跡である。国道34号線が３号線から分岐して国鉄鹿児島本線を越えると右前方にこの低段丘を認めることができる。この段丘の東部と北部および南部は，筑後川に注ぐ何本かの河川によ って広大な平野が展開するのであ って，佐賀平野の一つの基部でもある。

2．歴史的環境

田代天満宮東方遺跡のすぐ西方に太田観音東方甕棺遺跡があり，石蓋単甕棺が発見されている[注1]。また，北西へ約 700m の地点に柚比東方弥生遺跡[注2]があってこの低段丘一帯に甕棺群があり，この甕棺の中から銅戈１口と鉄剣２口が発見され（東京国立博物館蔵）この遺跡付近からは，石斧・石鏃や石包丁なども発見されている。この遺跡のすぐ西方に田代公園があって，この丘陵頂付近から甕棺８組が確認[注3]され，未だ相当数の甕棺が埋葬されているものと推定される。柚比町梅坂にある低丘陵頂付近にも甕棺遺跡[注4]があり，鳥栖市今泉町には藤の木竪穴住居跡がある。

鳥栖市から北方に連なる基山町の低丘陵――杓子が峰東方に派生する低段丘にも弥生遺跡[注5]が群在しているのであって，中でも久保田遺跡[注6]からは鉄剣１口が甕棺内から検出されている。

弥生時代における鳥栖市・基山町は農耕村落を基体とする経済圏を成立させており，その一　の文化的現象が田代天満宮東方遺跡であるといえるであろう。

この弥生時代の経済的・政治的体制は，佐賀平野においていち早く古墳文化を摂取し，古墳時代へと脱皮していることも忘れてはならないことである。この地域における主要な古墳を掲げておこう。装飾古墳として知られる史跡田代太田古墳[注7]をはじめとして，岡寺前方後円墳[注8]・剣塚[注9]・上野古墳[注11]・薄尾古墳群[注11]・杓子ヶ峰古墳群[注12]そして東十郎古墳群[注13]などである。

鳥栖地方の遺跡分布で注目される点は，河川の比較的上流に当る柚比地方が弥生時代においては，その中心的存在となっていて，この天満宮東方遺跡はその末端付近に位置

していると考えられる。しかし，古墳時代になると下流に位置するこの付近が当地方の中心的地位を占め，史跡田代太田古墳をはじめ,岡寺前方後円墳，庚申堂塚などの前方後円墳が築成されていて，史書に現われる筑紫火君の根拠地に推定されている。要するにこの地は，弥生時代から古墳時代にかけての鳥栖地方の社会の推移を物語る遺跡が分布していて，注目すべき位置にあるということができる。

注１．太田観音東方甕棺遺跡　　佐賀県の遺跡

注２．松尾禎作「佐賀県考古大観」祐徳博物館

注３．昭和47年12月鳥栖市教育委員会が応急調査を実施した。

注４．うつろ坂甕棺遺跡　　佐賀県の遺跡

注５．金丸遺跡・三ケ敷遺跡・片山遺跡・会田遺跡・玉虫遺跡などがある。　　佐賀県の遺跡

注６．柴元静雄「久保田遺跡出土の鉄剣について」　新郷土第 267 号

注７．佐賀県下の文化財

注８．佐賀県の遺跡

注９．松尾禎作「原始時代の鳥栖史」鳥栖史談２

注10．鏡山猛「基山町上野古墳」佐賀県文化財調査報告書３

注11　松尾禎作「薄尾古墳群について」鳥栖史談２

注12．佐賀県の遺跡

注13．木下之治「東十郎古墳群」佐賀県教育委員会

田代天満宮東方遺跡甕棺墓分布図

7 ～ 8

甕棺等一覧表

番号	組合	方法	方向	角度	上カメ長 全長	上カメ長 口	下カメ長 全長	下カメ長 口	凸帯 上カメ	凸帯 下カメ	粘土	備考
1	カメ・カメ	合口	N－E 3°	約3					ナシ	ナシ	有	下カメ，口縁下に沈線二条部分的破壊
2	カメ・カメ	合口	N－E 11°	4°		72	92	72	口縁下二条 胴二条	口縁下二条 胴二条	有	
3	カメ・カメ	合口	N－E 38°	8	92.5	75	93	75	口縁下二条M 胴二条	胴一条	無	
4	カメ・カメ	合口	N－E 29°	16°	84	58	87	58	胴一条	胴一条	有	
5	カメ・カメ	合口	N－E 125°	－4°	79.5	62	84	59	ナシ	ナシ	有	
6	カメ・カメ	合口	N－W 126°	8°	112	70	115	75	胴二条	口縁下一条 胴二条	有	
7	カメ・カメ	合口	N－E 131°	2°	—	約70	94	74	胴二条	胴二条	無	
8	カメ・カメ	合口	N－W 133°	3°	115	72	約 120	75	口縁下一条 胴二条	口縁下一条 胴二条	無	
9	カメ・カメ	合口	N－E 62°	8°	95	65	95	65	胴二条	胴二条	有	
10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破壊・破片だけ残存する。
11	カメ・カメ	合口	N－W 164°	－4		48	65	50	口縁下二条	口縁下二条	有	
12	カメ・カメ	合口	N－W 60°	3	42	35	45	35	—	—	有	
13	カメ・カメ	合口	N－E 27°	4	85	65	85	65	—	—		

番号	組合	方法	方向	角度	上カメ長		下カメ長		凸帯		粘土	備考
					全長	口径	全長	口径	上カメ	下カメ		
14	カメ・カメ	合口	N－E 11°	18°	82	57	64	55	胴一条	口縁下二条	有	
15	カメ・カメ	合口	N－E 18°	3°	85	65	約 85	約 65	胴二条	胴一条	無	
16	カメ・カメ	合口	N－E 122°	34°	50	42	50	42	口縁下一条	口縁下一条	無	
17	カメ・カメ	合口	N－E 77°	48°		約 38	42	38	ナシ	ナシ	無	
18	カメ・カメ	合口	N－W 21°	－2°	102	75	102	75	口縁下一条 胴二条	胴二条	有	
19	？・カメ	—	N－W 44°	15°	—	—	—	—	—	ナシ	無	小児
20	カメ・カメ	合口	N－E 161°	－8°	76	62	84	65	胴一条	胴一条	有	下カメ，口縁下沈線三条
21	カメ・カメ	合口	N－E 153°	－5°	80	63	82	65	胴一条	胴一条	無	
22	カメ・カメ	合口	N－E 11°	14°	—	—	53	約 40	口縁下二条	口縁下二条	無	上カメ，ほとんど破壊
23	カメ・カメ	合口	N－E 119°	29°	—	—	45	43	—	—	無	下カメ，ほとんど破壊
24	ハチ・カメ	合口	N－W 77°	－8°	30	44	52	46	口縁下一条	口縁下二条	無	
25	カメ・カメ	覆口	N－E 142°	48°.5	56	53	105	61	胴一条	口縁下一条 胴二条	無	上カメの口縁を打ちかいている。 上カメの凸帯キザミ目有
26	ハチ・カメ	合口	N－W 171°	—	—	68	—	75	ナシ	胴二条	有	大部分破壊
27	カメ・カメ	合口	N－E 29°	11°	88	70	80	60	胴二条	—	有	

番号	組合	方法	方向	角度	上カメ長		下カメ長		凸帯		粘土	備考
					全長	口径	全長	口径	上カメ	下カメ		
28	カメ・カメ	合口	N－W 147°	2°	62	52	62	52	口縁下二条	口縁下二条	有	上カメ口縁キザミ目有
29	ハチ・カメ	合口	N－W 158°	2°	—	—	84	—	口縁下一条	ナシ	有	下カメ，口縁下二条沈線，口縁キザミ目有
30	カメ・カメ	合口	N－E 19°	23°	—	38	84	44	—	胴二条	無	
31	ハチ・カメ	合口	N－E 158°	1°	42	64	97	68	ナシ	口縁下一条 胴二条	無	
32	カメ・カメ	合口	N－E 33°	2°	52	37.5	約 50	38	口縁下一条	口縁下一条	有	
33	カメ・カメ	合口	N－E 77°	39°	—	36	—	36	ナシ	ナシ	無	
34	ハチ・カメ	合口	N－E 119°	25°	35	75	118	85	ナシ	胴二条	無	
35	カメ・カメ	合口	N－W 131°	水	—	40	—	45	ナシ	胴二条	有	ほとんど破壊されている。
36	カメ・カメ	合口	N－E 138°	－ 9°	92	74	84	68	胴二条	胴二条	有	
37	ハチ・カメ	合口	N－E 91°	25°	36	73	110	73	ナシ	口縁下一条 胴二条	無	
38	ハチ・カメ	合口	N－E 123°	28°	37	66	101	68	ナシ	口縁下一条 胴二条	無	
39	・カメ		N－E 約 135°	約 37°	—	—	—	—	—	胴二条 (M)	—	ほとんど破壊されている。
40	カメ・カメ	合口	N－E 96°	36°	—	—	40	—	ナシ	ナシ	無	
41	ハチ・カメ	合口	N－W 164°	3°	—	64	81	67	ナシ	ナシ	有	下カメ，口縁下二条胴二条，沈線有

番号	組合	方法	方向	角度	上カメ長		下カメ長		凸帯		粘土	備考
					全長	口径	全長	口径	上カメ	下カメ		
42	カメ・カメ	合口	N－W 153°	－3°	78	56	80	56	ナシ	胴一条	有	上カメ，口縁キザミ目有
43	フタ・カメ	合口	N－W 165°	8°	11	38	72	38	ナシ	胴二条	無	
44	ハチ・カメ	合口	N－E 167°	41°	—	—	112	—	ナシ	胴二条	無	
45	カメ・カメ	合口	N－W 164°	0.5°	31	30	—	32	ナシ	口縁下一条	有	下カメ，ほとんど破壊
46	—・カメ	—	N－W 30°	約6°	—	—	—	—	—	胴二条	—	ほとんど破壊
47	—・カメ	—	N－F 115°	約38°	—	—	—	—	—	—	—	ほとんど破壊されている
48	カメ・カメ	合口	N－E 47°	1°	40	36	40	36	ナシ	ナシ	無	
49	カメ・カメ	合口	N－W 103°	26°	42	38	42	38	ナシ	ナシ	無	
50	カメ・カメ	合口	N－W 38°	ほぼ水平	—	37	—	37	ナシ	ナシ	無	
51	ハチ・カメ	合口	N－E 132°	31°	32	75	115	78	ナシ	口縁下一条 胴二条	無	
52	ハチ・カメ	合口	N－E 169°	17°	—	68	115	81	ナシ	口縁下一条 胴二条	無	
53	カメ・カメ	合口	N－E 129°	13°	—	35	54	35	ナシ	胴一条	無	
54	カメ・カメ	合口	N－E 111°	43°	—	36	40	36	ナシ	ナシ	無	
55	カメ・カメ	合口	N－E 110°	8°	88	70	82	64	胴一条	胴一条	有	

番号	組合	方法	方向	角度	上カメ長		下カメ長		凸帯		粘土	備考
					全長	口径	全長	口径	上カメ	下カメ		
56	カメ・カメ	合口	N－W 161°	2°	86	65	92	76	胴一条	胴一条	有	
57	カメ・カメ	合口	N－W 129°	－11°	93	71	92	73	胴一条	胴一条	有	
58	ハチ・カメ	合口	N－W 92°	39°	35	64	112	72	ナシ	口縁下一条 胴二条	無	
59	カメ・カメ	合口	N－W 171°	2°	92	72	92	72	胴一条	胴一条	有	
60	カメ・カメ	合口	N－W 126°	－6°	40	39.5	44.5	35	胴二条	口縁下一条	有	
61	カメ・カメ	合口	N－W 172°	－11°	52	44	54	45	口縁下二条	口縁下二条	有	
62	カメ・カメ	合口	N－E 140°	－4°	53		52		口縁下一条	口縁下二条	有	
63	カメ カメ	合口	N－E 123°	－3°	58.5	44.5	56	46	口縁下二条	口縁下一条	有	
64	カメ・カメ	合口	N－E 131°	－4°	67.5		63.5		口縁下一条	口縁下二条	有	
65	カメ・カメ	合口	N－E 112°	－7°	53.5		59		口縁下一条	口縁下二条	有	
66	カメ・カメ	合口	N－E 171°	3°	49	42	49		口縁下一条		無	
67	カメ・カメ	合口	N－W 153°	－2°	82	58	82	58	胴一条	胴一条	有	
68	カメ・カメ	合口	N－W 161°	9°	89	72	90	72	胴二条	胴一条	有	上カメ，ヨコへ一条，タテへ四条の沈線有
69	カメ・カメ	合口	N－W 179°	8°	52		50		口縁下一条	口縁下二条	無	

番号	組合	方法	方向	角度	上カメ長		下カメ長		凸帯		粘土	備考
					全長	口径	全長	口径	上カメ	下カメ		
70	カメ・カメ	覆口	N－E 140°	41°	—	—	93	54	胴二条	口縁下一条 胴二条	無	上カメ，口縁を打ちかいている。
71	カメ・ツボ	挿入	N－W 171°	13°	57	50	約40	25	口縁下二条	胴下条	有	
72	カメ・カメ	合口	N－E 87°	3°	—	—	—	—	口縁下一条	口縁下一条	有	
73	カメ・カメ	合口	N－E 18°	15°	41	—	55	—	胴一条	口縁二条	有	上，下カメ共，口縁下キザミ目有
74	カメ・カメ	合口	N－W 159°	3°	84.5	68.5	88	77	ナシ	ナシ	有	上，下カメ共，ヨコに走る沈線二条有 上カメ，口縁にキザミ目有
75	カメ・カメ	合口	N－E 33°	－7	49	42	49	42	口縁下二条	口縁下二条	有	
76	カメ・カメ	合口	N－W 143°	－8°	51	40	50	44	口縁下二条	口縁下一条	有	
77	カメ・カメ	合口	N－W 149°	2°	48	41	53	42	口縁下二条	口縁下一条	有	
78	ハチ・カメ	挿入	N－W 157°	4°	32	46	48	42	口縁下一条	口縁下一条	有	
79	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破片，甕棺だけ残存。
80	カメ・カメ	合口	N－W 152°	－5°	47	—	56	—	口縁下一条	口縁下一条	有	上カメ口縁キザミ目有
81	カメ・カメ	合口	N－W 129°	－13°	53	44	57	47	口縁下一条	口縁下二条	有	
82	カメ・カメ	合口	N－W 139°	－4°	86	78	91	78	ナシ	ナシ	有	
83	カメ・カメ	合口	N－W 101°	－7°	61	46	58	46	口縁下二条	口縁下一条	有	上カメ，口縁キザミ目有

番号	組合	方法	方向	角度	上カメ長		下カメ長		凸帯		粘土	備考
					全長	口径	全長	口径	上カメ	下カメ		
84	カメ・カメ	合口	N－E 51°	5°	56	42	56	42	口縁下二条M	口縁下二条	有	
85	カメ・カメ	合口	N－E 42°	18°	81	58	84	58	胴二条	ナシ	有	下カメヨコに走る沈線二条
86	ハチ・カメ	合口	N－E 158°	－2°	44	72	114	75	ナシ	胴二条	無	
87	カメ・カメ	合口	N－W 164°	－3°	84	68	91	67	胴一条	胴一条	有	
88	カメ・カメ	合口	N－W 146°	－16°	43	38	55	40	口縁下一条	口縁下一条	有	
89	カメ・カメ	合口	N－W 149°	－3°	58	45	64	49	口縁下二条	口縁下二条	有	
90	ハチ・カメ	合口	N－W 159°	－8°	37	66	81	71	口縁下一条	ナシ	有	
91	カメ・カメ	覆口	N－E 128°	34°	—	—	98.5	57	胴二条	口縁下一条 胴二条	無	上カメの口縁を打かいている。
92	カメ・カメ	合口	N－E 25°	8°	87	82	87	82	胴一条	胴一条	有	
93	カメ・ツボ	覆口	N－E 26°	34°	39.5	32	—	—	口縁下一条	くびれ部一条	有	下ツボの口縁を打ちかいている。
94	—・カメ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破壊，甕片だけ残存。
95	ハチ・カメ	合口	N－W 58°	ほぼ水平	—	—	—	—	—	—	—	

Ⅲ　田代天満宮東方遺跡の概要

1．甕棺墓等の概要

田代天満宮東方 約 200m の低段丘頂部にこの遺跡はある。現在水田と宅地跡であって，第３インターチェンジの敷地は，この段丘の主軸南半分である。今回の調査もインターチェンジ構内に限られたので，南斜面の調査に終始した。しかし，甕棺の分布等からみて，調査区の北側にも相当数の甕棺が埋置されていると推察される。

今回の調査区は約8400㎡であった。そこで道路の側溝部分に露出している甕棺の調査と平行してトレンチを９本入れることによって遺跡の範囲確認を行った。その結果，東西25m ・南北25m の間に甕棺群が存在することが確認されたのである。

この範囲の中で確認した甕棺墓等は95組を数えた。即ち，大形甕棺墓46組，中形甕棺墓26組・小形甕棺墓13組および壺棺１組である。大形甕棺には甕と甕との組せが31組・甕と鉢の組合せ14組があり，甕と蓋（形土器）のそれが１組ある。また，中形甕棺墓の中には１組の鉢形土器と甕形土器の組合せがあった。

また，埋置された甕棺等の組合せ・方位および傾斜などに規則性を見出すことはできない。しかしながら，東北隅の大形甕棺墓を中心とする一群・その西隣に大形土坑に埋葬された中形甕棺墓の一群，それに中央南端の大形・中形・小形甕棺墓群の３群をグループの墳墓としてとらえることができるであろう。このことは地域集団の墓域の中に血縁的・家族墓的要素を有するものが存在していたものとして注目される。この中で７組の甕棺が大形土坑内に埋置されている[注1]ことは特異な存在として注目されるところである。

また，丹塗大形器台(片)が表採されており，甕棺墓地における一つの祭祀用具として注目していきたい[注2]。

注１．大形土坑内に数躰を埋葬した例は，呼子町大友遺跡・小城町晴田小学校庭遺跡および山口県県土井ケ浜遺跡などがあるが，甕棺葬は当遺跡のみである。

注２．大形器台は，小城町宿遺跡・唐津市万麓遺跡などに発見されており，ともに甕棺墓地の範囲内から出土している。

丹 塗 大 形 器 台

2．甕棺墓等の分類

死体の埋葬に使用されている土器の種類や大きさにも多様性があって一様ではない。また，その呼称の在り方も現在までまちまちで統一性がない。この報告書では，歴史的に慣用されてきた用語を使用しながらもつぎのように規定した。主体となる土器の種類によって，甕形土器の場合は「甕棺墓」と呼び，壺形土器を「壺棺墓」,鉢形土器を「鉢棺墓」と称することにした。

また，土器と土器の接合方法も，ほぼ同形の口縁部を接口しているものを「合口」と呼び，主体となる土器の口縁部より大きい土器の口縁部で接合して，主体の口縁部を覆う形をとるものを「覆口」逆に主体の口縁にすっぽり入ってしまう小さな土器の口縁部の場合を「挿入」と呼称する。この用語を甕棺墓の頭に付して，「合口甕棺墓」のように呼ぶこととする。

甕棺墓等の墓域にあって主流をしめるのは甕棺墓である。この甕形土器にも大小の差があるところから，主体となる甕棺土器の長径が80cm以上を「大形」，50cm以下を「小形」と呼び,その中間を「中形」と呼び，「大形合口甕棺墓」のように頭に付して呼称することにした。

さらに，甕棺墓は，主体となる甕形土器に接合する土器の種類に，甕・鉢・蓋形土器などがあって一様ではない。

(1) 大形の甕棺墓

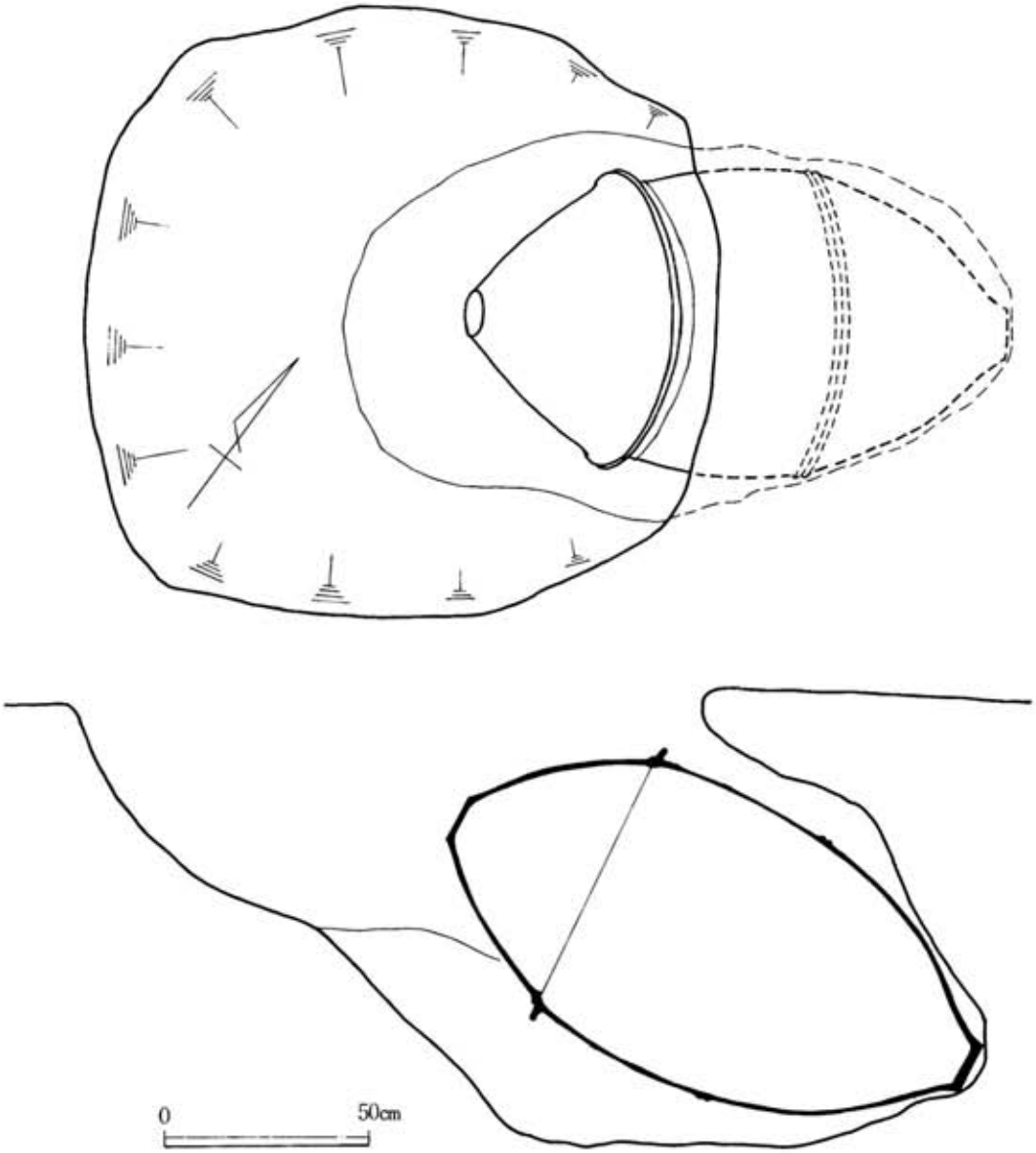
大形の甕棺墓は，墓域の全域に分布している。87組のうちの46組――53%が大形の甕棺で占めている。大形の甕棺墓は，合口甕棺墓が43組―93%でその主流を示しており，挿入甕棺墓が２組で４%であり覆口甕棺墓は１組であって，挿入・覆口甕棺等は通例ではないことが知られる。

合口甕棺墓は，甕形土器と甕形土器の組合が29組で68%を占め，甕形土器と鉢形土器の組合は13組で30%であり，甕形土器と蓋形土器の組合は１組であって，合口甕棺墓の主体は甕形土器と甕形土器の組合せであることがわかる。この主流を占めるセットでは，ほぼ同形の甕形土器を接合しているのが通例である。

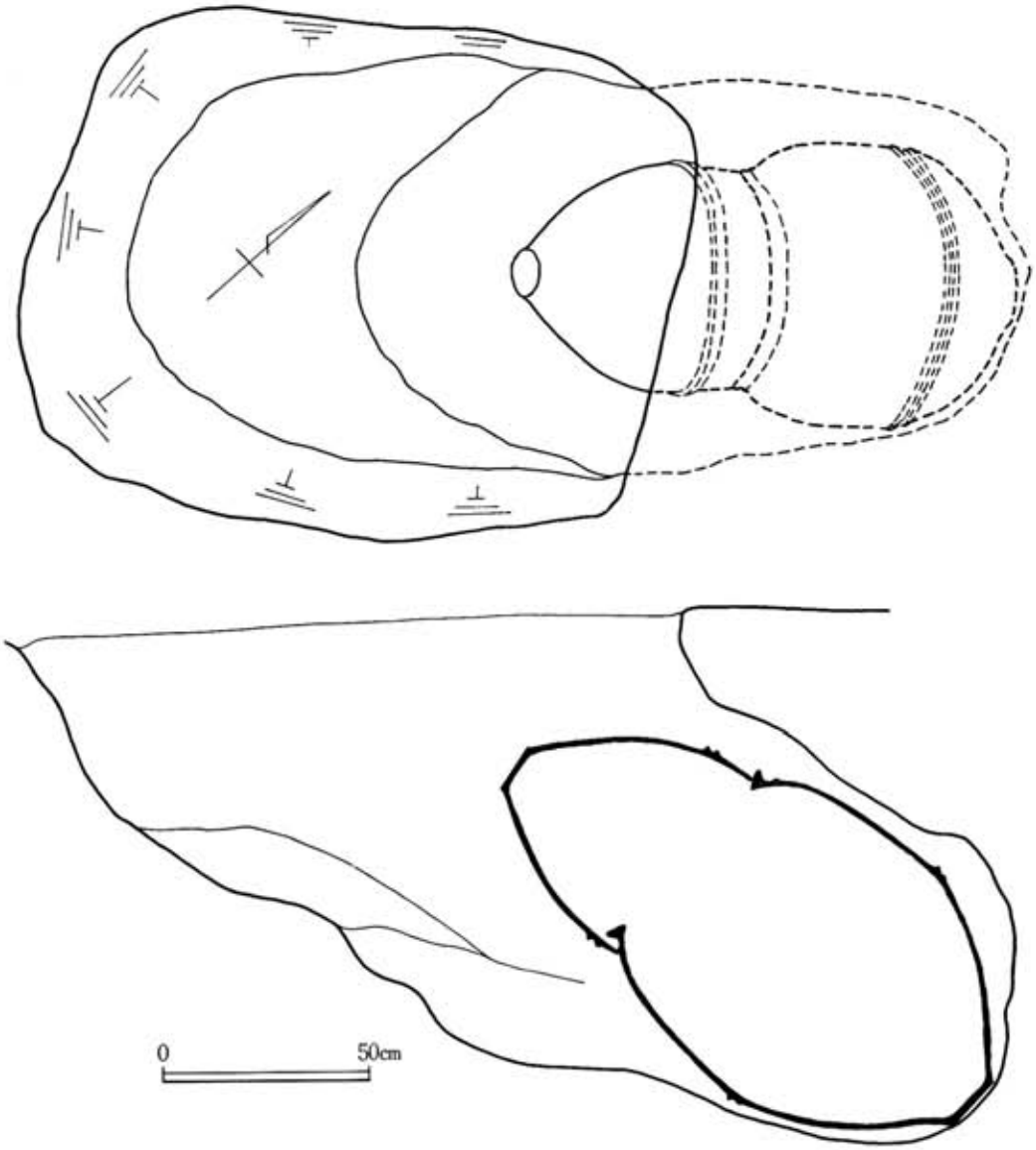
甕形土器と甕形土器の組合せでありながら覆口・挿入の形態をとっている場合は，異形であるときであって，必らず口縁・肩部を打ち欠いていることである。しかも，この三例はこの遺跡の南西端に集合していることが注目ちれる。埋置角度・方位・粘土帯の有無について特徴を見ることはできない。しかし，甕形土器と鉢・蓋形土器の組合せをも

つ合口甕棺墓および，覆口・挿入甕棺墓は傾斜の高い方向に棺の主体部を置き，しかも底部を深く穿って必ず斜位に埋葬していることは，甕棺墓の一つの在り方としてとらえられる。

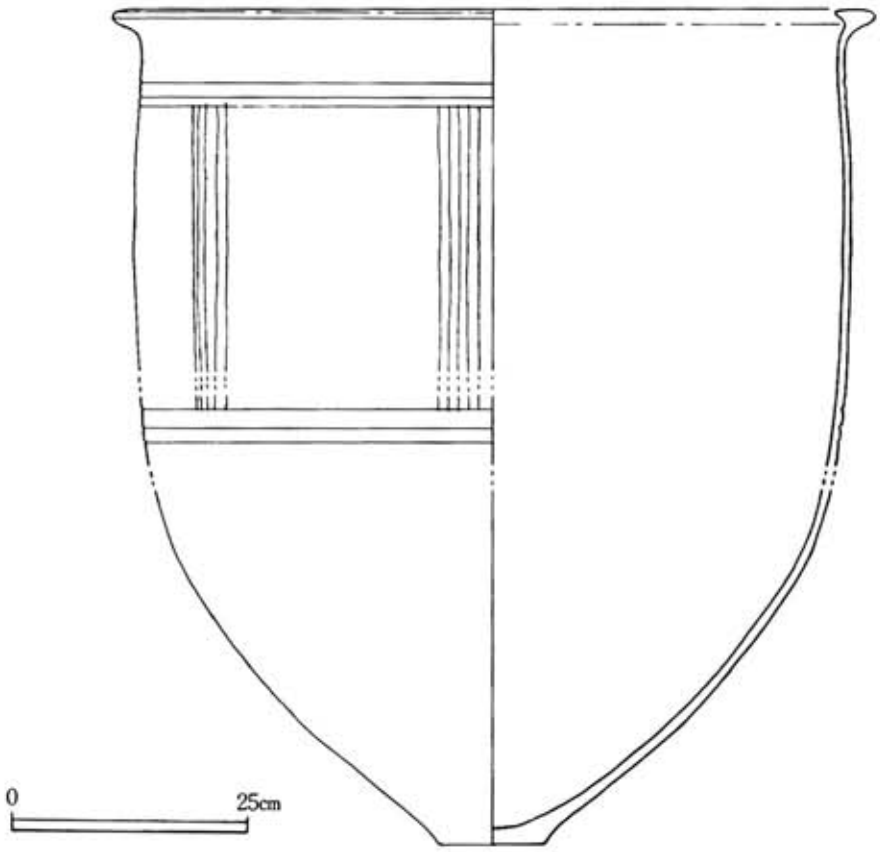
第38号大形合口甕棺墓の平面図および断面図



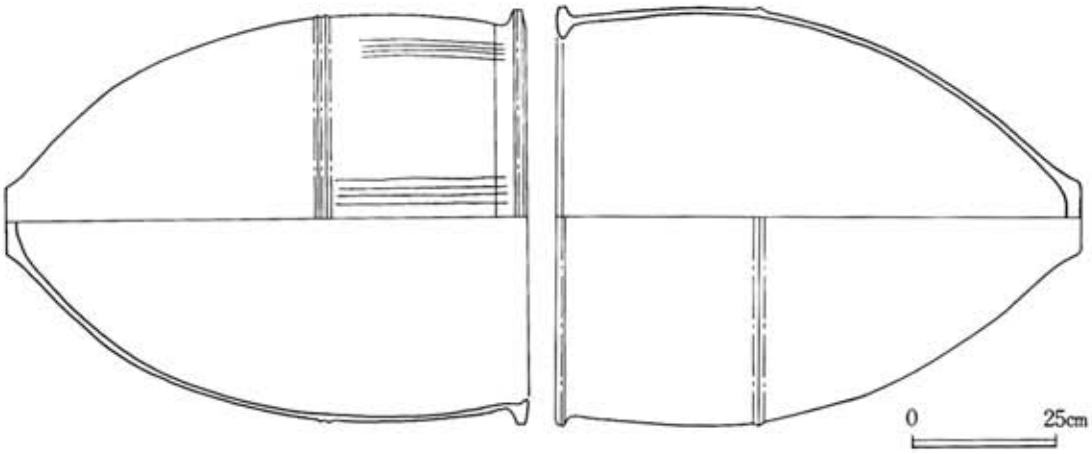
第70号大形合口甕棺墓の平面図および断面図



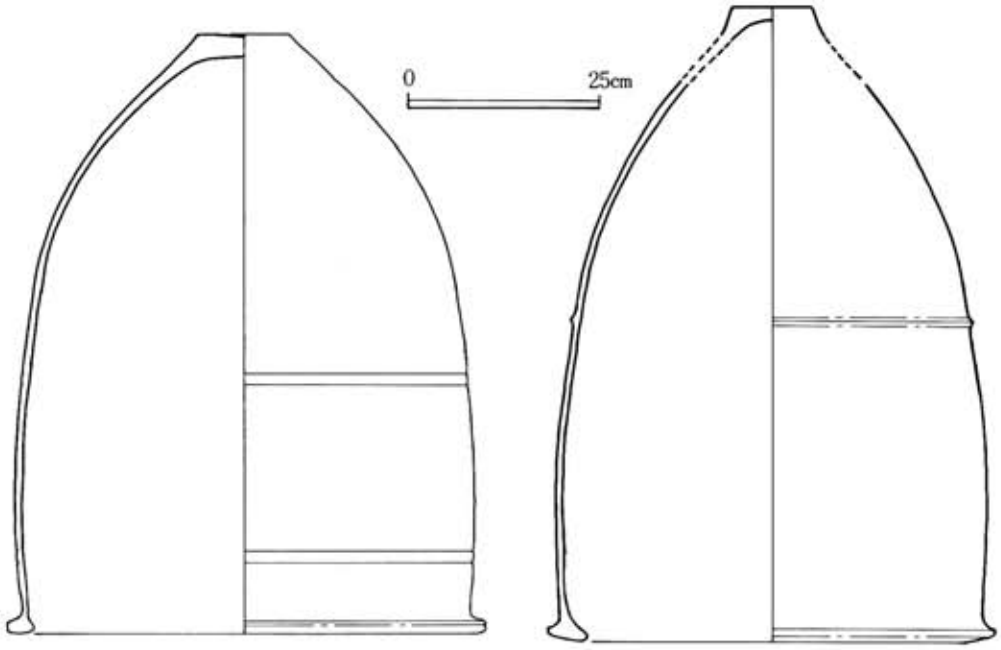
第74号大形合口甕棺実測図



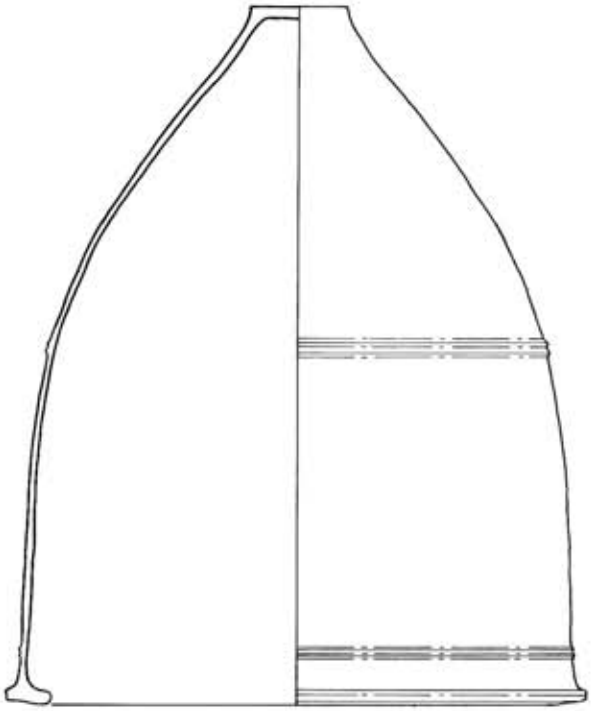
第68号大形合口甕棺実測図

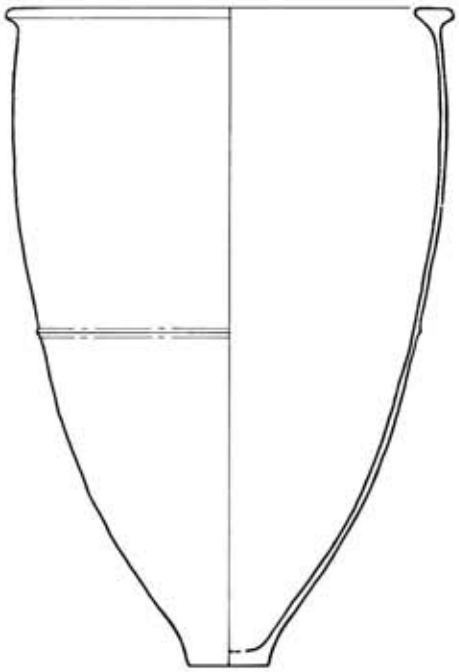


第５号大形合口甕棺（上甕）実測図



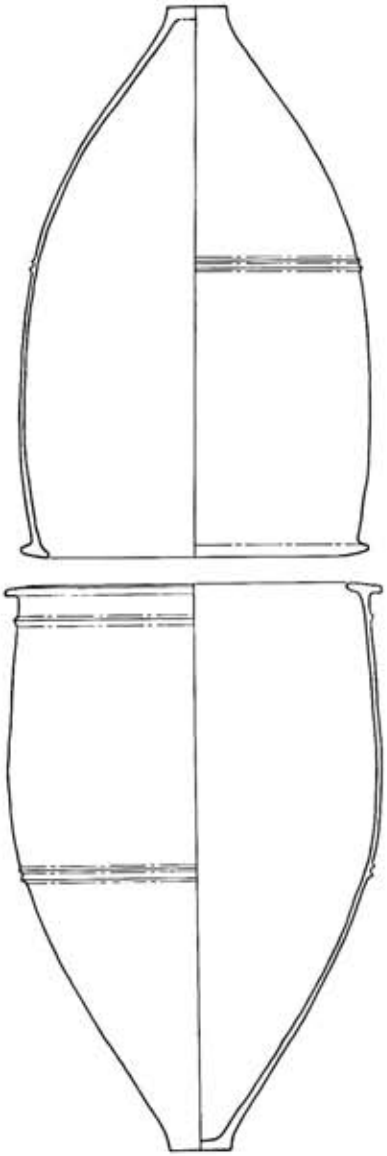
第３号大形合口甕棺（上甕）実測図



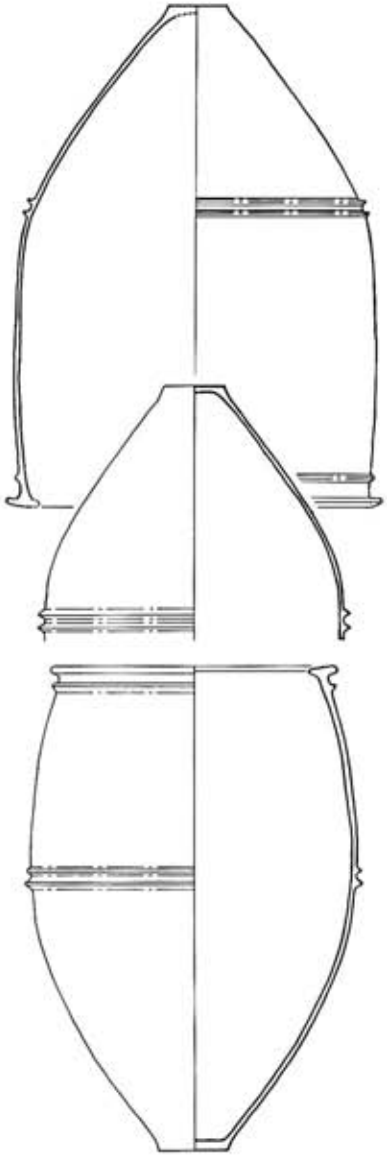


第４号大形合口甕棺実測図

第 6 号大形合口甕棺実測図



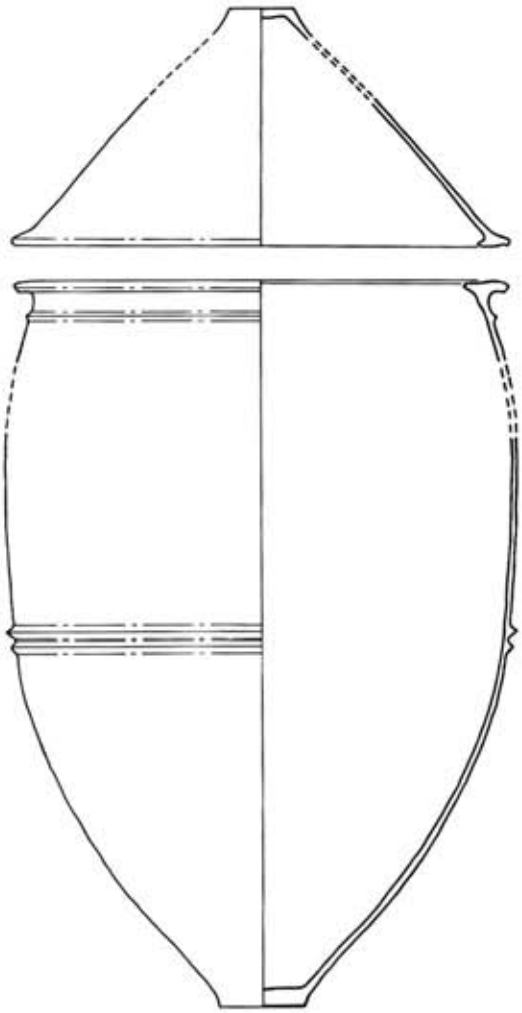
第18号大形合口甕棺（上甕）実測図



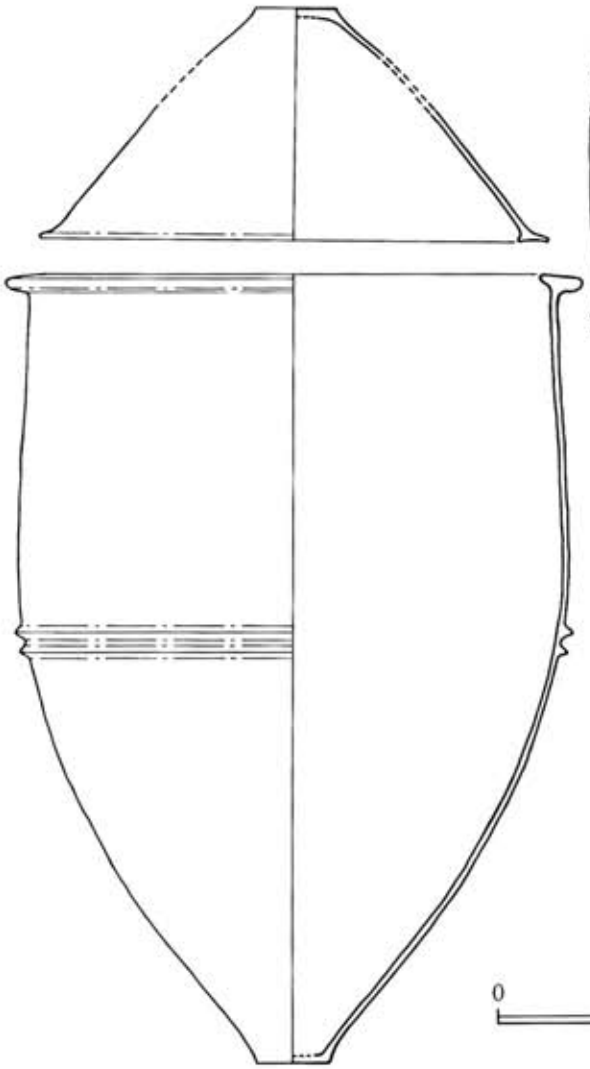
0　25cm

第91号大形覆口甕棺実測図

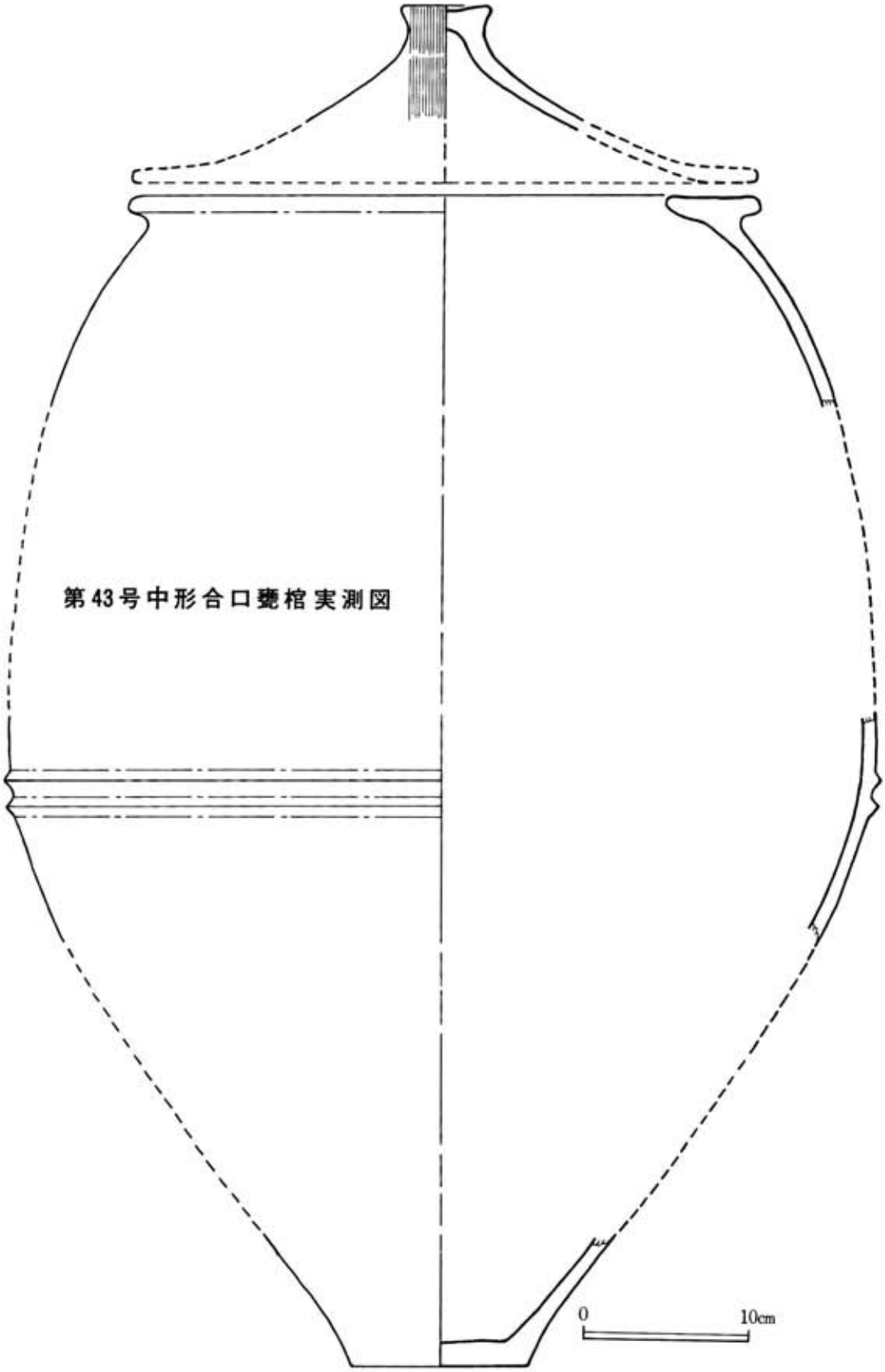
第37号大形合口甕棺実測図



第34号大形合口甕棺実測図



0　25cm



第43号中形合口甕棺実測図

(2) 中形の甕棺墓

中形の甕棺墓は，墓域の全域に分布する。大形土坑内に埋埋置された７組の合口甕棺墓は注目されるところであるが，他の19組は全体的に分布しており，大形・小形の甕棺墓と交錯して存在する。

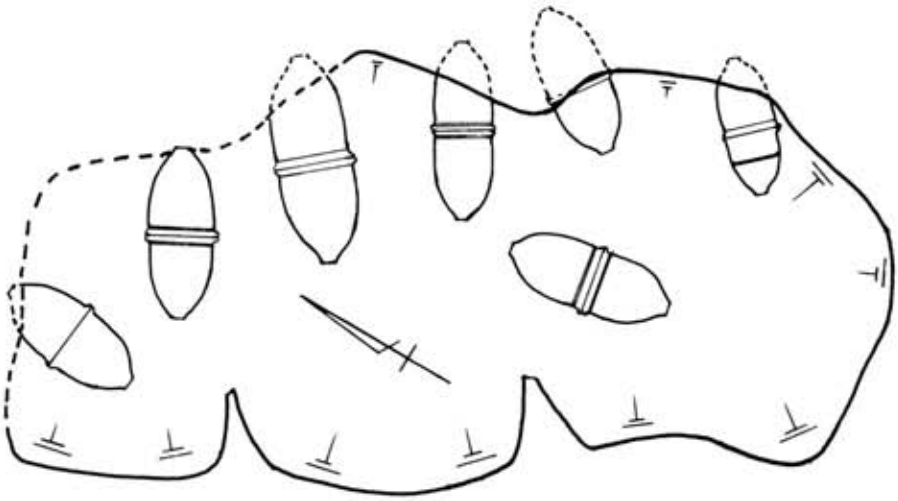
中形の甕棺墓は26組で，全体に占める割合は30％である。これはすべて合口甕棺墓である。しかも，甕形土器と鉢形土器の組合である１例を除けば，ほぼ同形の甕形土器の組合であって，中形甕棺墓の主流をなしている。

大形土坑は長径６ｍ，短径 2.5 ｍ を測るが，この土坑は３っに区分して形成されたと考えられる。即ち，南室が直径 2.5　の円径プランでU字の断面をもち３組の中形甕棺を埋置している。中室は長径2.7m・短径２ｍ の楕円形プランを呈してU字の断面をもち２組を内蔵している。北室は長径２ｍ ・短径 1.5m の角丸矩形プランでU字断面をとり，２組が埋葬されている。

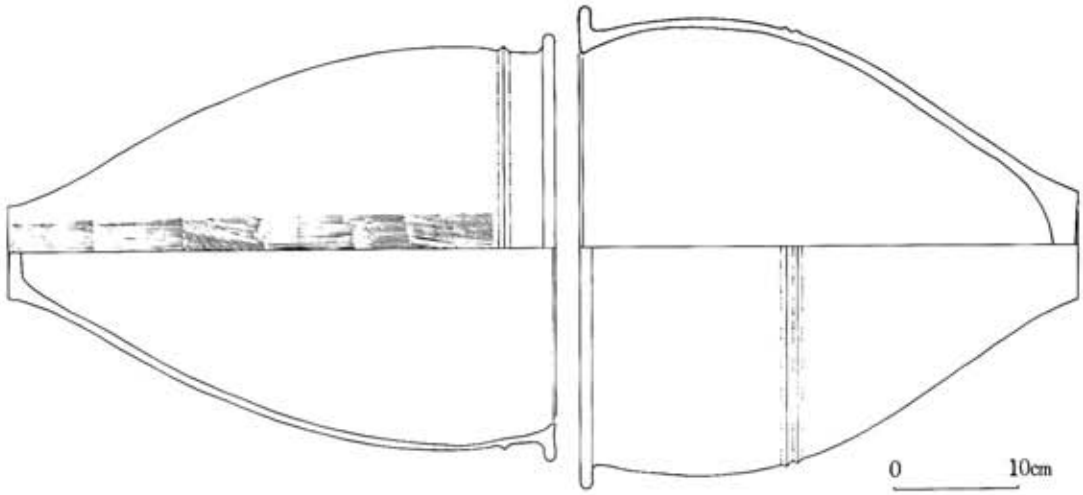
調査の時点では，三者の土坑を区別することができなかった。しかし，土坑を掘削する手法の類似，甕棺を埋置する場合の方向性があり，東壁を穿って上甕を埋置する手法が共通しており，また３室の土器形式に差がないことである。このことから，同時埋葬でないとしたら，ほとんど時間差のない時期に形成されたものと推察される。

はたしてこの大形土坑に埋葬された中形の甕棺墓７組は何を意味しているのであろうか。しかも他の中形甕棺墓の方向・傾斜・粘土帯の有無など共通性はみられない。

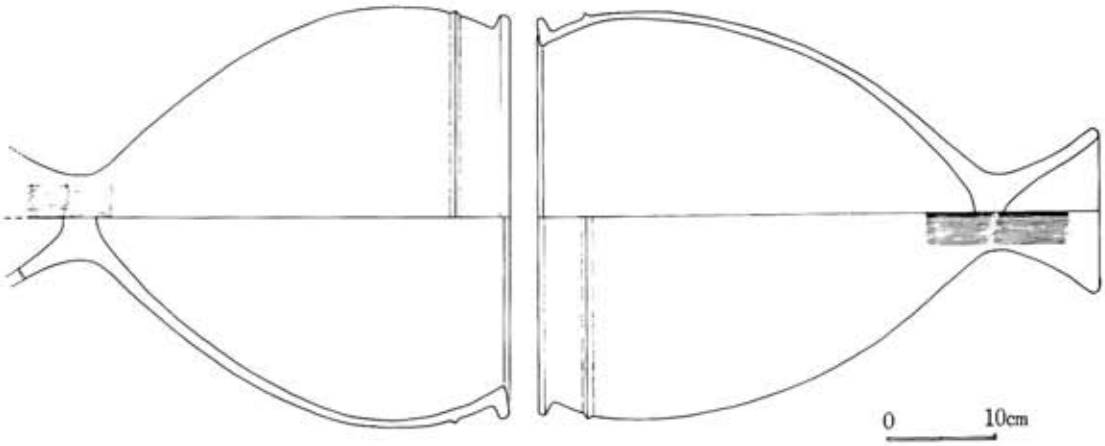
大形土拡内の中形合口甕棺墓群実測図



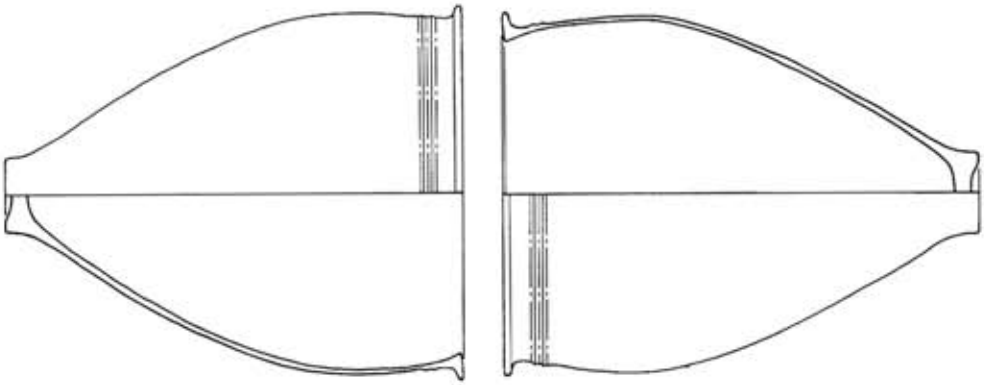
第60号中形合口甕棺実測図



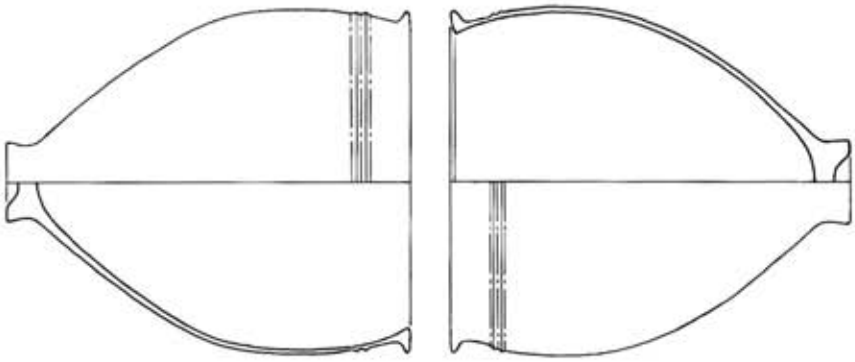
第32号中形合口甕棺実測図



第63号中形合口甕棺実測図

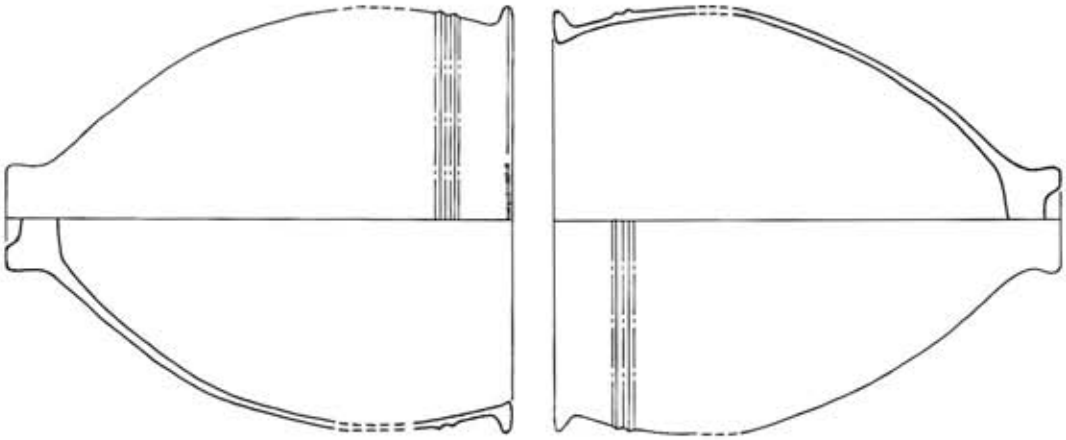


第75号中形合口甕棺実測図

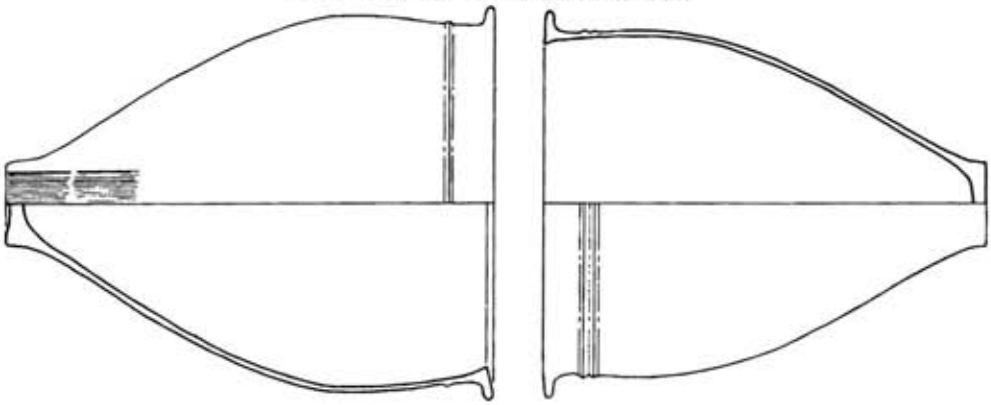


0 25cm

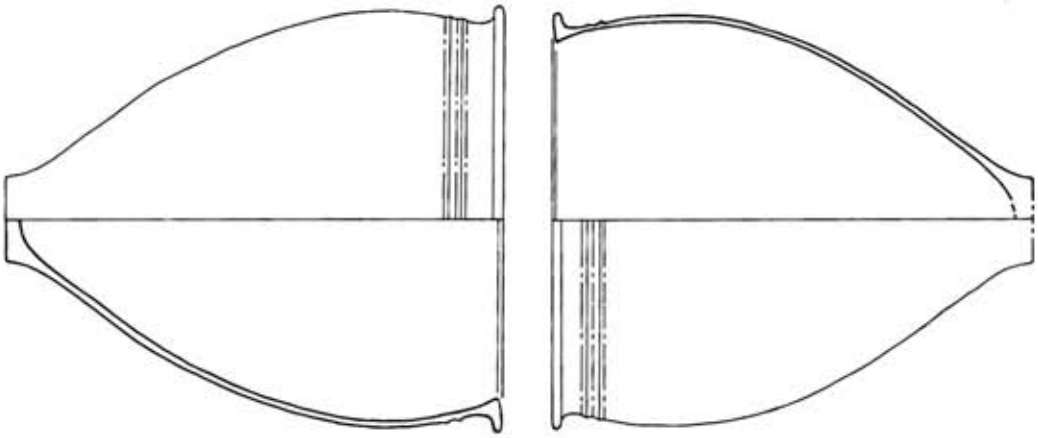
第28号中形合口甕棺実測図



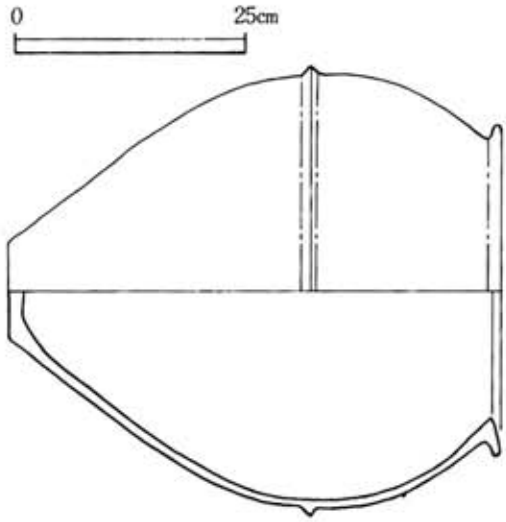
第77号中形合口甕棺実測図

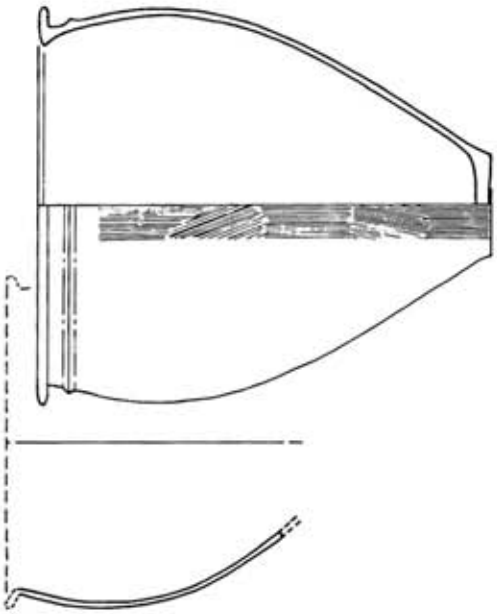


第61号中形合口甕棺実測図



第66号小形甕棺（上甕）実測図





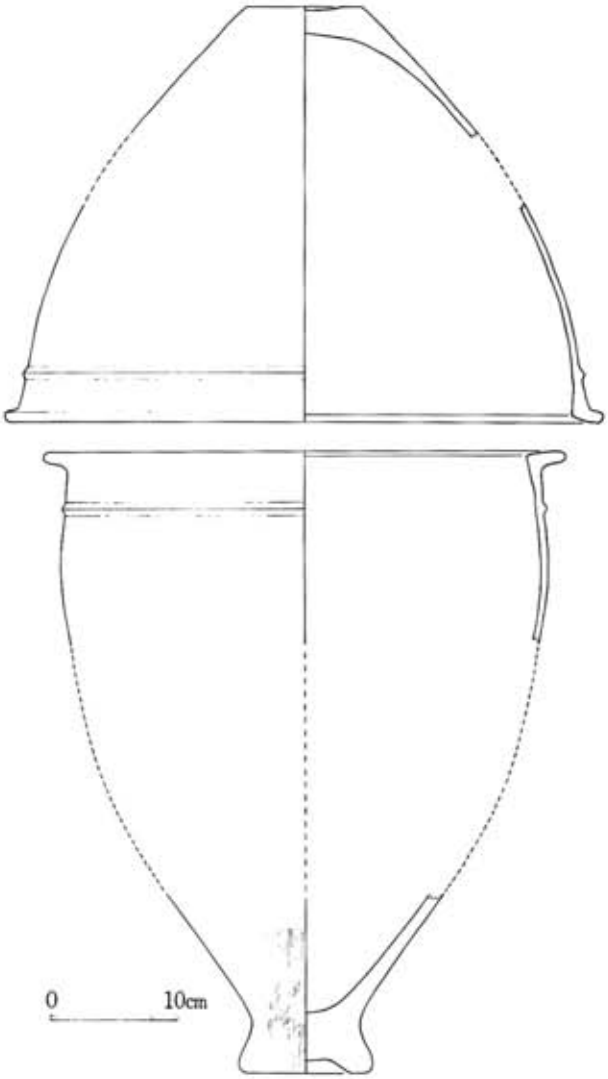
第53号中形合口甕棺実測図

(3) 小形の甕棺墓

従来小児用甕棺など呼ばれてきたものであって，小形の甕棺墓と称する。

13組が散発的に全域に分布する。全体では16%を占めている。小形甕棺墓においても甕形土器と甕形土器の組合で合口甕棺墓が12組で93%を占め，覆口甕棺墓は１組のみであって，小形甕棺墓においても甕形土器のセットで合口甕棺墓がその主流をなしていることが知られる。

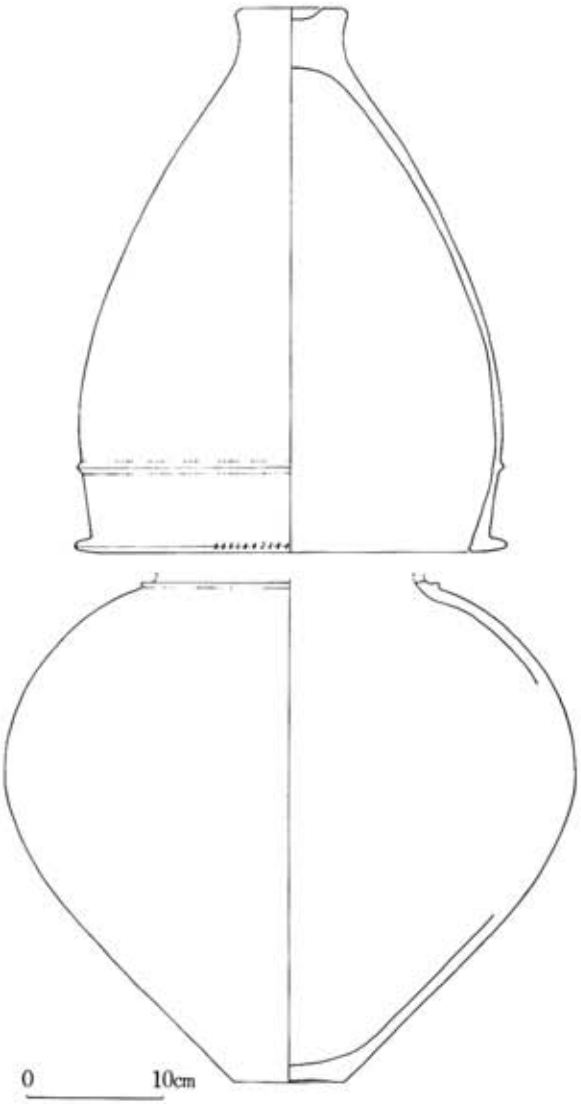
第78号小形覆口甕棺実測図



(4) 壺棺墓

壺棺墓は，棺の主体が壺形土器である場合をいい，この遺跡からは2組が発見された。全体からすれば数少ない墓制である。この主体である壺形土器はともに口縁部を打ち欠き，甕形土器をもって覆っている。1組は中形の合口甕棺墓と，他の1組は大形の合口甕棺墓と漆って埋葬されていた。

第93号壺棺実測図



3．ま と め

佐賀平野における甕棺墓等の群集墳は，その全域の山麓部末端近くに位置し分布している。

田代天満宮東方遺跡の発掘調査は，遺構の全体にまでおよんでいないが約 100組の甕棺墓等が確認されたことは，郡集墳として大規模なものの一つであって，神崎町二子・上峰村切道・中原町姫方遺跡などに比較されるであろう。このように群集墳の大規模なものが，佐賀平野の東部に存在していることは，弥生時代において農耕集落がいち早く発達したことを物語るものであろう。

田代天満宮東方遺跡に出土する土器は，その特徴から２群に分けることができよう。そのⅠ群は土器の口縁部に刻目をもち，口縁部から肩部にかけて数条の沈線文が施され，或いは▲断面をもつ２条の凸帯をもち，口縁部から肩部にかけて大きく内弯する断面をもつ土器群である。

Ⅱ群の土器は，口縁部から肩部にかける断面がいわゆるT字形を呈し，▲断面をもつ２条の凸帯をもつものである。

両群における埋葬方法――方位・傾斜・粘土帯――に変化はみられないことも特色であるう。

要するにⅠ群は弥生時代中期前葉をさかのぼることはなく，Ⅱ群は中期中葉を下るものではないと考えられるのであるが，Ⅱ群の甕棺墓等か約90％を占めているところから，弥生時代中期中葉を中心に墓地づくりが営まれたと推定される。

この遺跡の甕棺内またはその周囲から，被葬者への副葬品あるいは献供品等に類するものは発見されなかった。このことは，弥生時代におけるこの地域が，鳥栖地方の中心的地位を占めていたと推定される柚比付近の周縁地に当っていたことを物語るものではなかろうか。

この遺跡は，弥生時代における甕棺の単純遺跡であって，箱式石棺や土坑墓等を混在せず，しかも単棺をも含まない２個の甕形土器または壺形土器との組合せからなる画一的墓制の集団墓地である点も一つの大きい特色である。すなはち，合口甕棺が主流をなし，その中でも同形式の甕形土器の組合せが大勢を占めている。その中で，大形甕棺墓53％・中形甕棺が30％・小形甕棺墓および壺棺墓が16％であって，小児の死亡率が比較的に少なかったことを，この遺跡は示しているように思われる。

この群集墓において，さらに小集団のグループ構成が認められるかどうかということを明確にすることはできなかった。しかし，遺跡の中央南端に配置されている大形・中

形・小形の甕棺の一群は，一つのグループとして認めることが可能であるし，大形土坑の存在もまた一つのグループと考えることが可能ではなかろうか。このグループの存在は，弥生時代にすでに血縁的・家族集団的グループの墓域か，群集墓地の中に萌芽しつつあったことを物語るものではなかろうか。

弥生時代における甕棺群集墓の調査研究は，その背後にある農耕集落との関連に立って研究を進めるべき段階にあり，また，一面においては，隔絶性を特色とする古墳時代の古墳との対比において検討を加えらるべきではなかろうかと考えられるのである。このような考えに立って，甕棺群集墓地の中に，血縁的・家族集団的グループの墓域の設定の萌芽がこの遺跡においては認められるのではなかろうかという試論を一応のべて，大分の批判を仰ぎたいと考えている。

図　　版

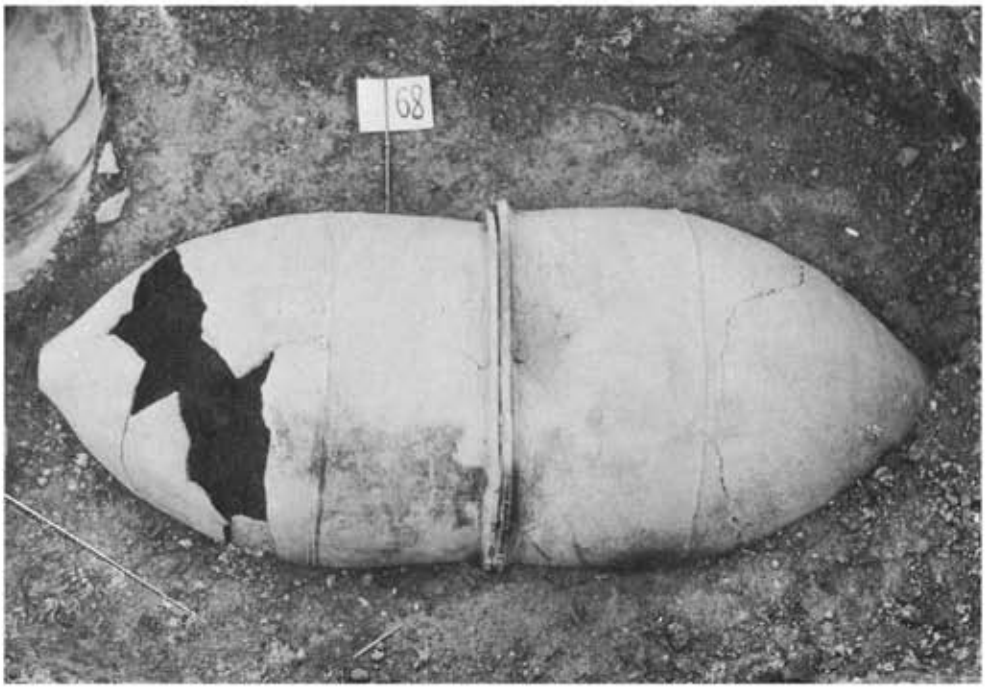
田代天満宮東方遺跡発掘調査風景

遺跡近郊の航空写真

遺 跡 の 全 景

グループをなす甕棺墓群

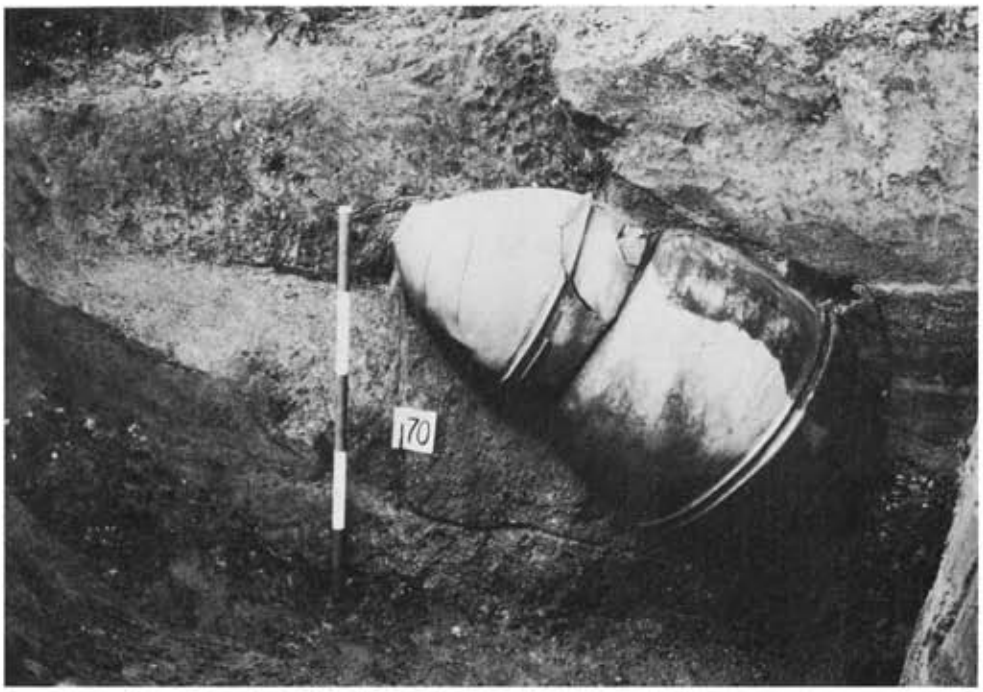
第68号大形合口甕棺墓



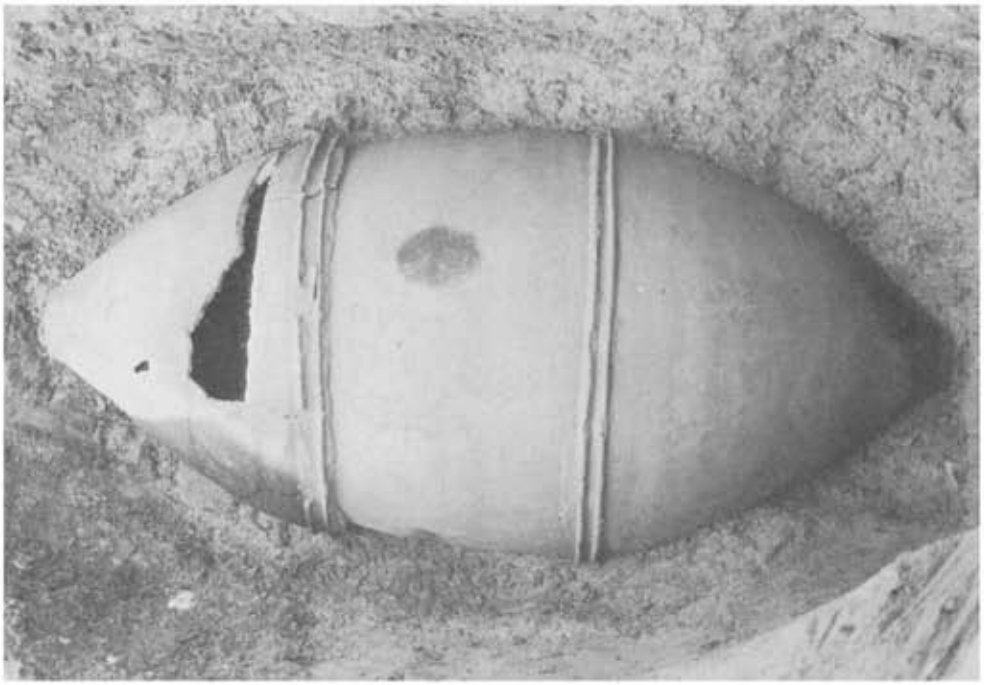
同肩部の沈線文

第70号大形覆口甕棺墓の挿入口

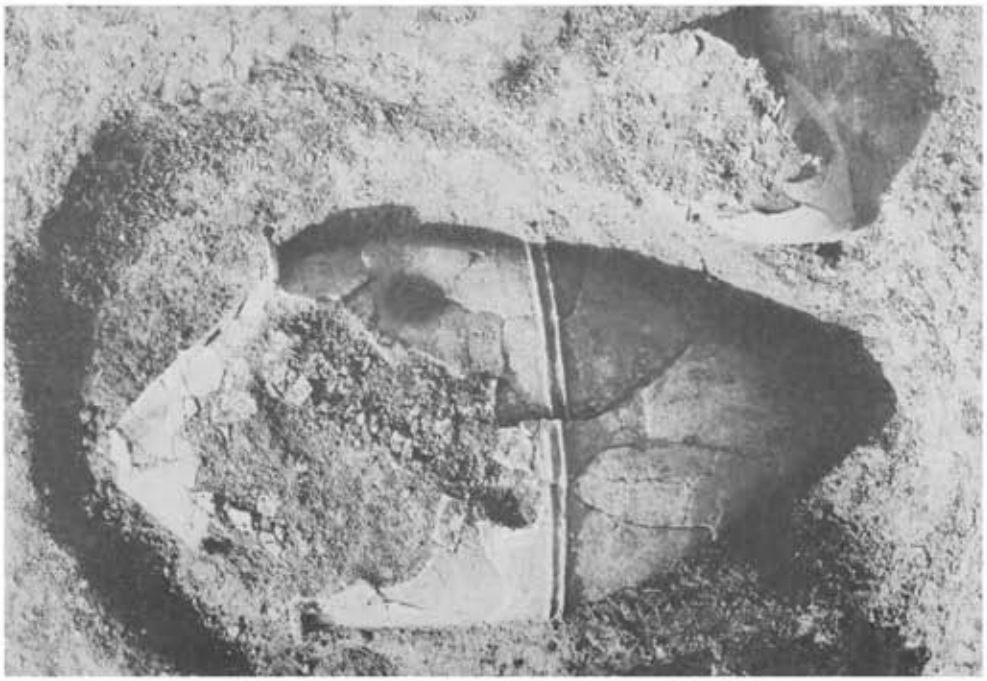
同　　断　　面



第35号大形覆口甕棺墓



第34号大形合口甕棺墓

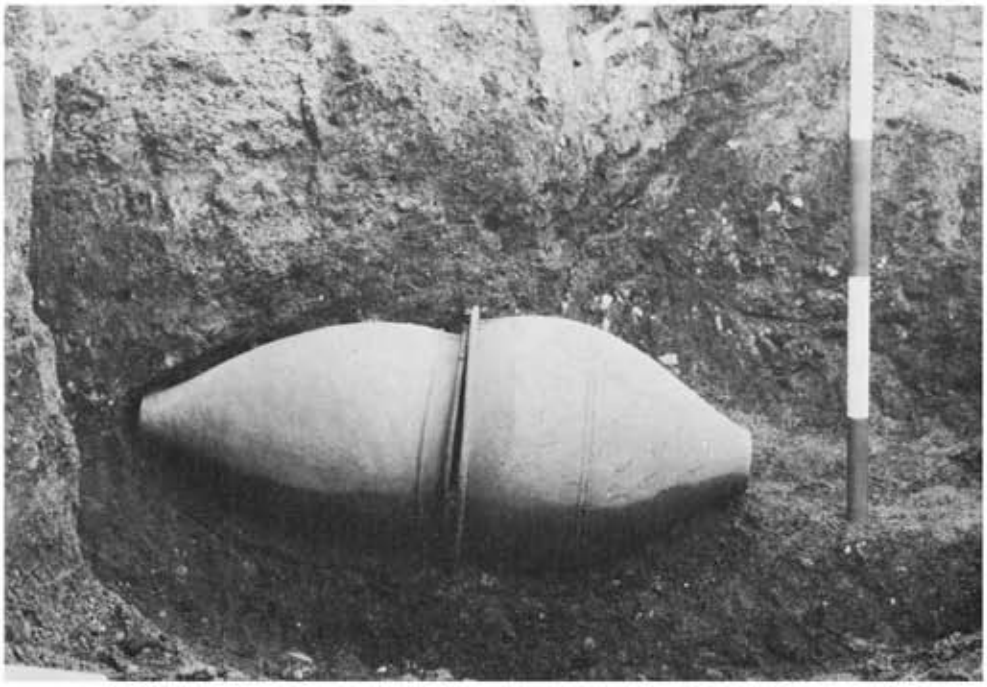


第38号大形合口甕棺墓の挿入口

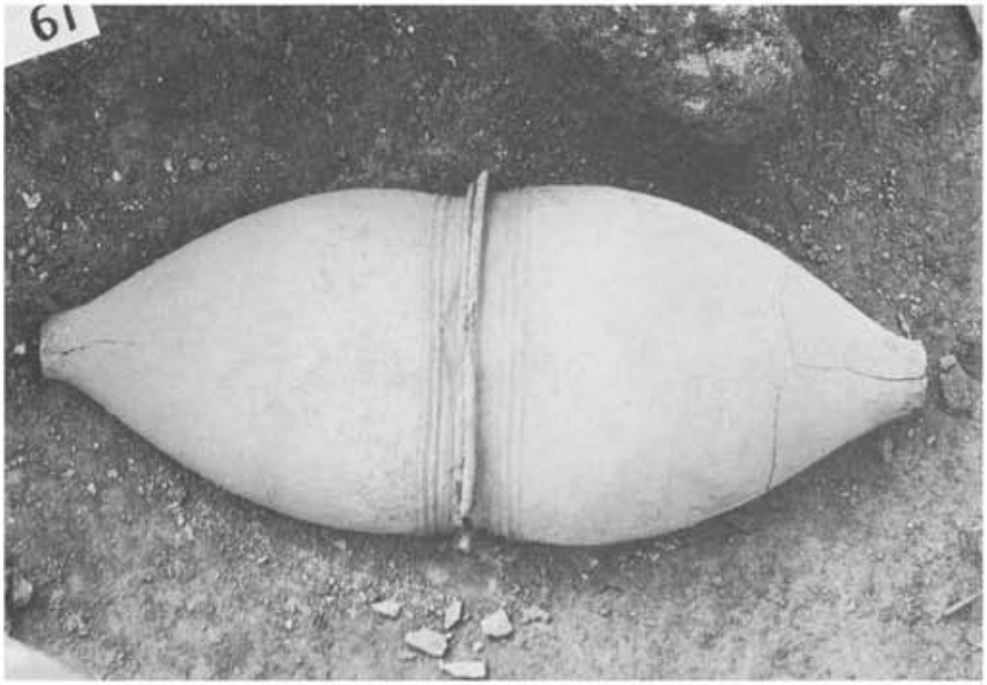
同土坑ラインの状態

第43号中形合口甕棺墓

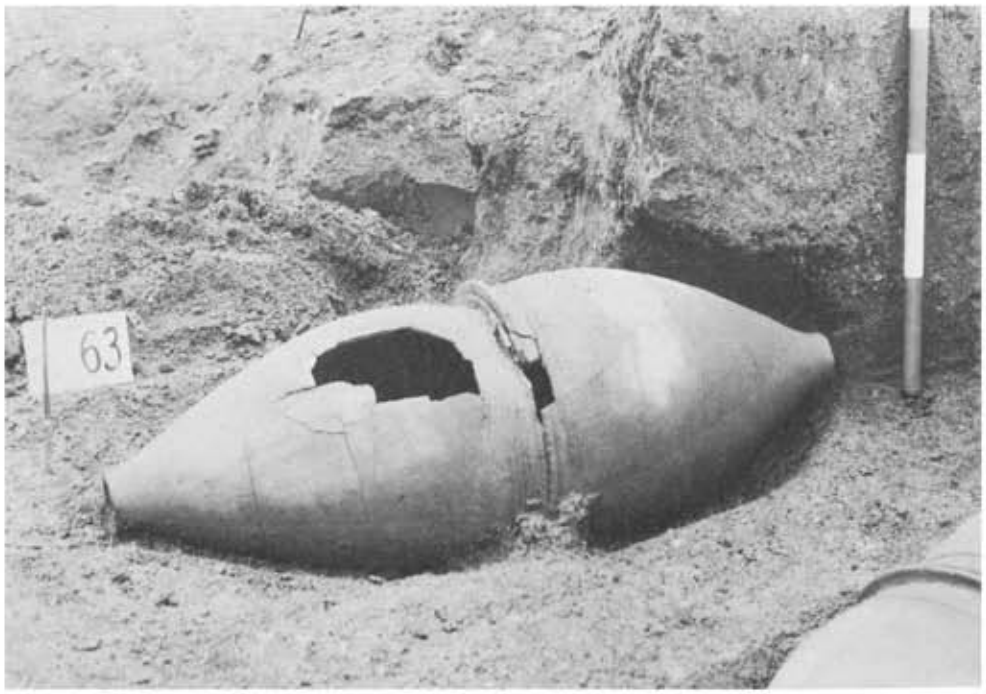
第60号中形合口甕棺墓



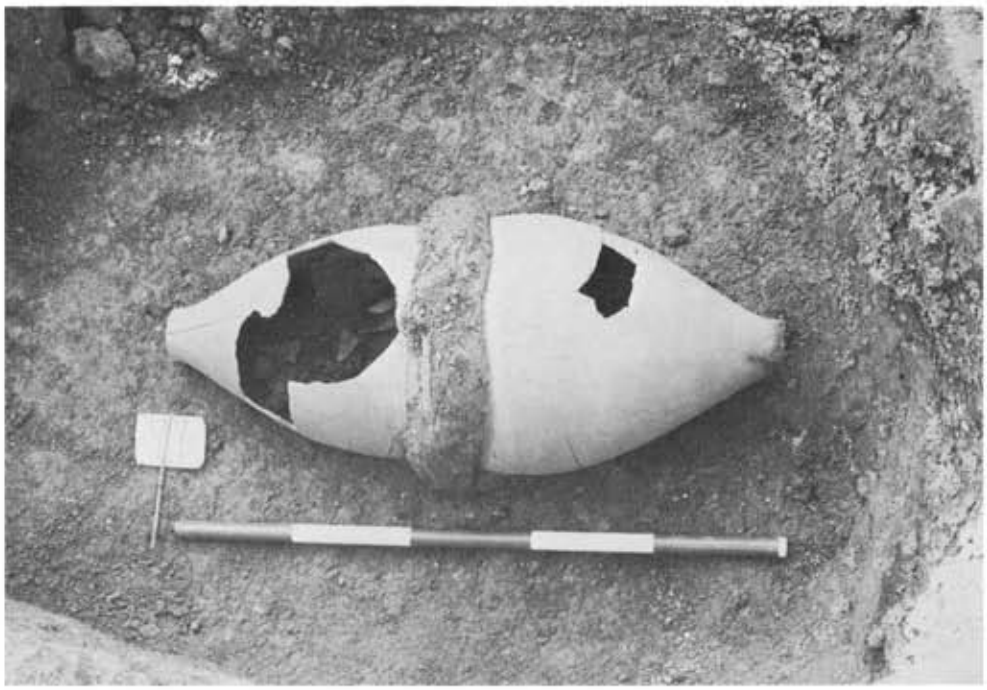
第61号中形合口甕棺墓



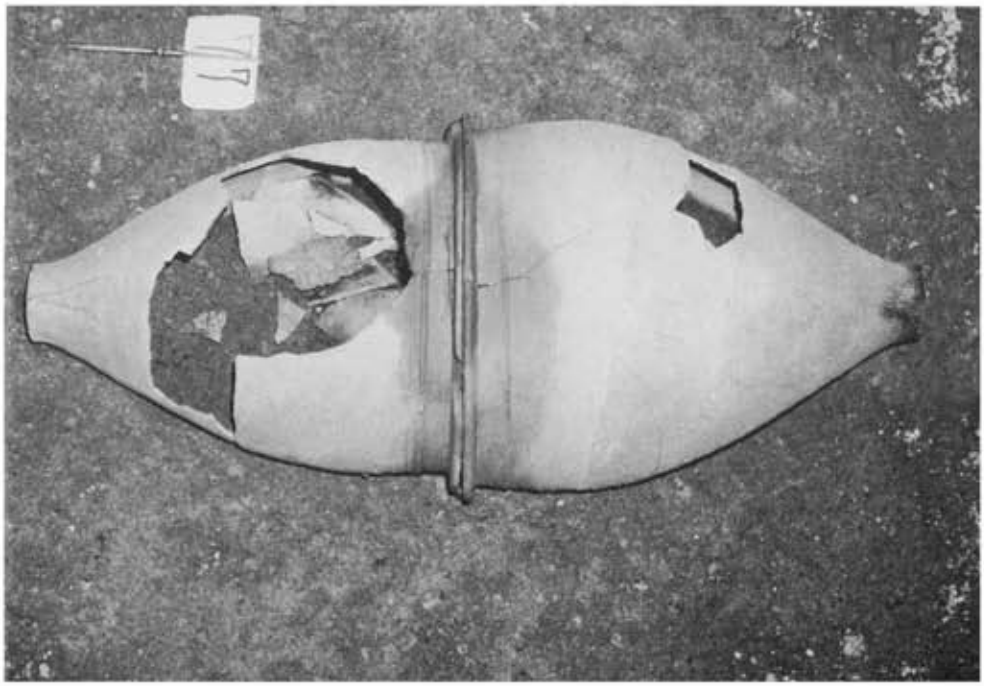
第63号中形合口甕棺墓とその土壙ライン



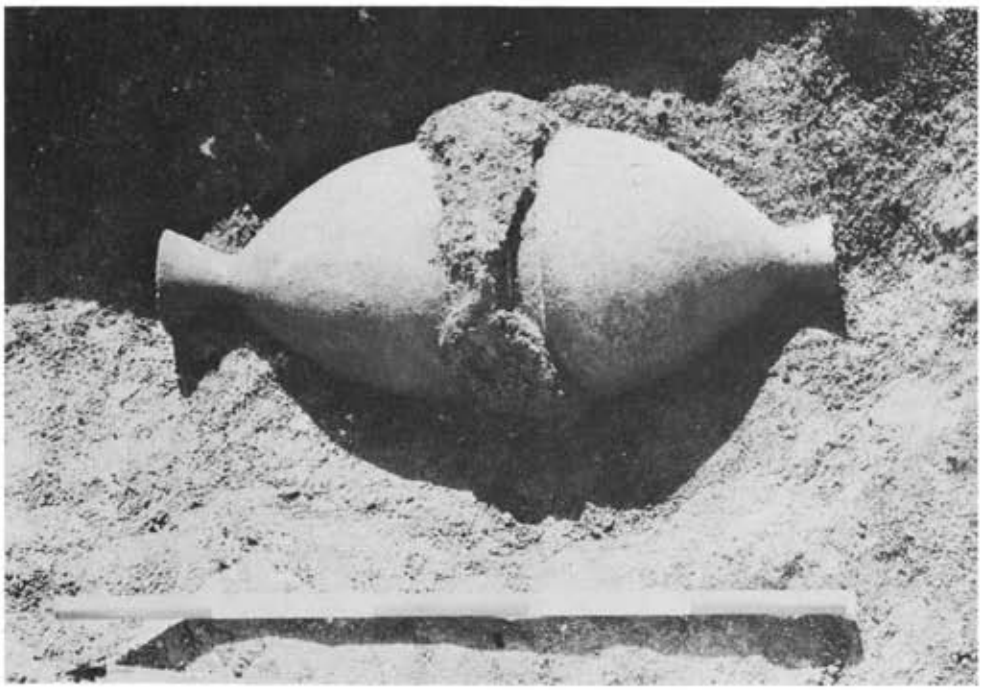
第77号中形合口甕棺墓の粘土帯



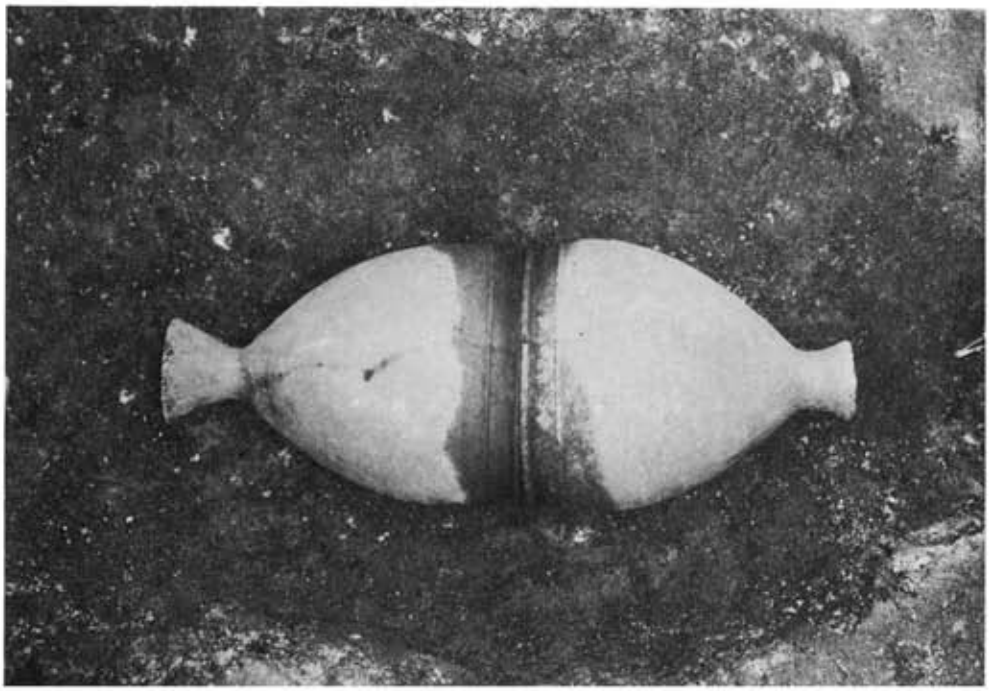
第77号中形合口甕棺墓



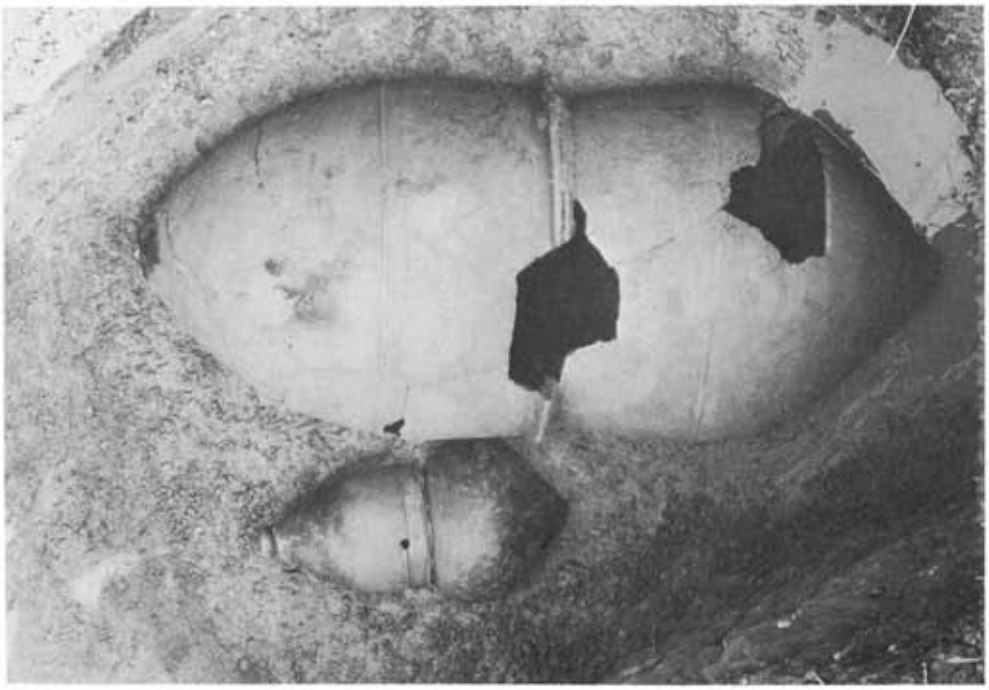
第32号中形合口甕棺墓の粘土帯



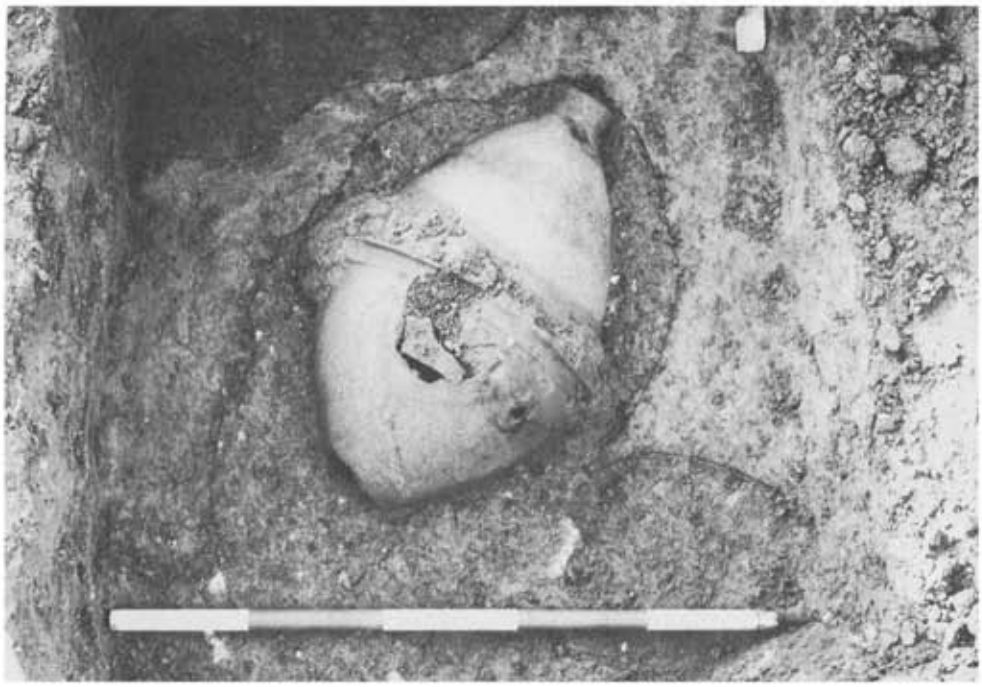
第32号中形合口甕棺墓



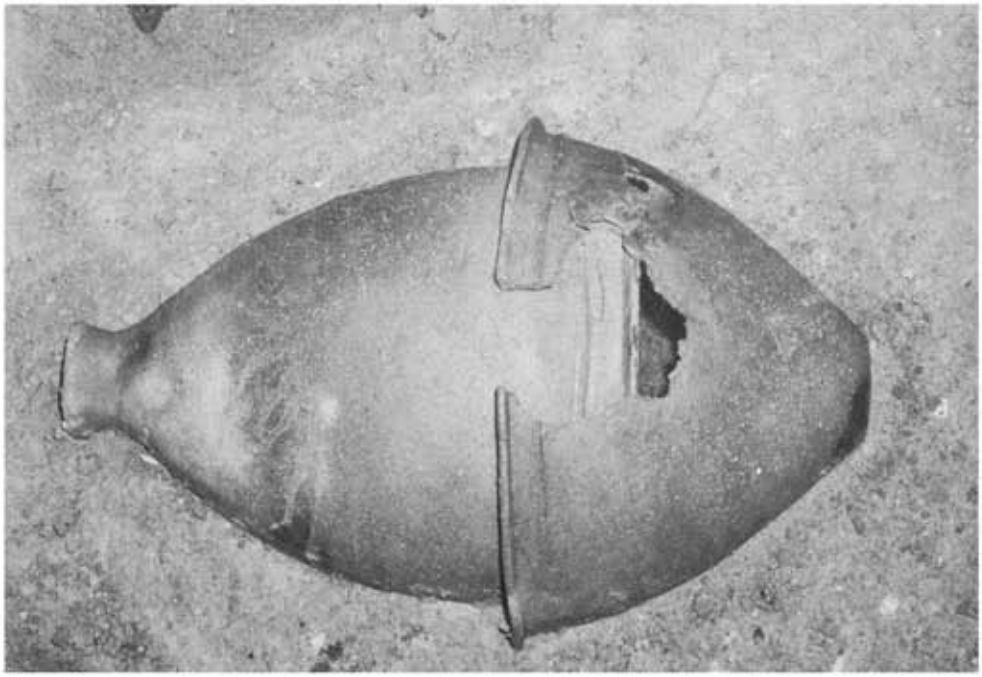
第93号壺棺墓の出土状態



第78号小形覆口甕棺墓の粘土帯と土坑



第78号小形覆口甕棺墓



あ と が き

この報告書の編集担当者はつぎのとおりである。

○　遺構等の実測は木下巧・天本洋一

○　写真撮影は木下巧

○　実測図のトレースは天本洋一

○　報告書の原稿は木下巧

○　報告書の編集は木下巧

○　報告書は県教育庁文化財調査監木下之治が鑑修した。

田代天満宮東方遺跡

佐賀県文化財調査報告書

第　24　集

昭和48年３月31日　印刷
昭和48年３月31日　発行

編集　佐賀県教育庁文化課
発行　佐賀県教育委員会
印刷　佐賀県印刷局